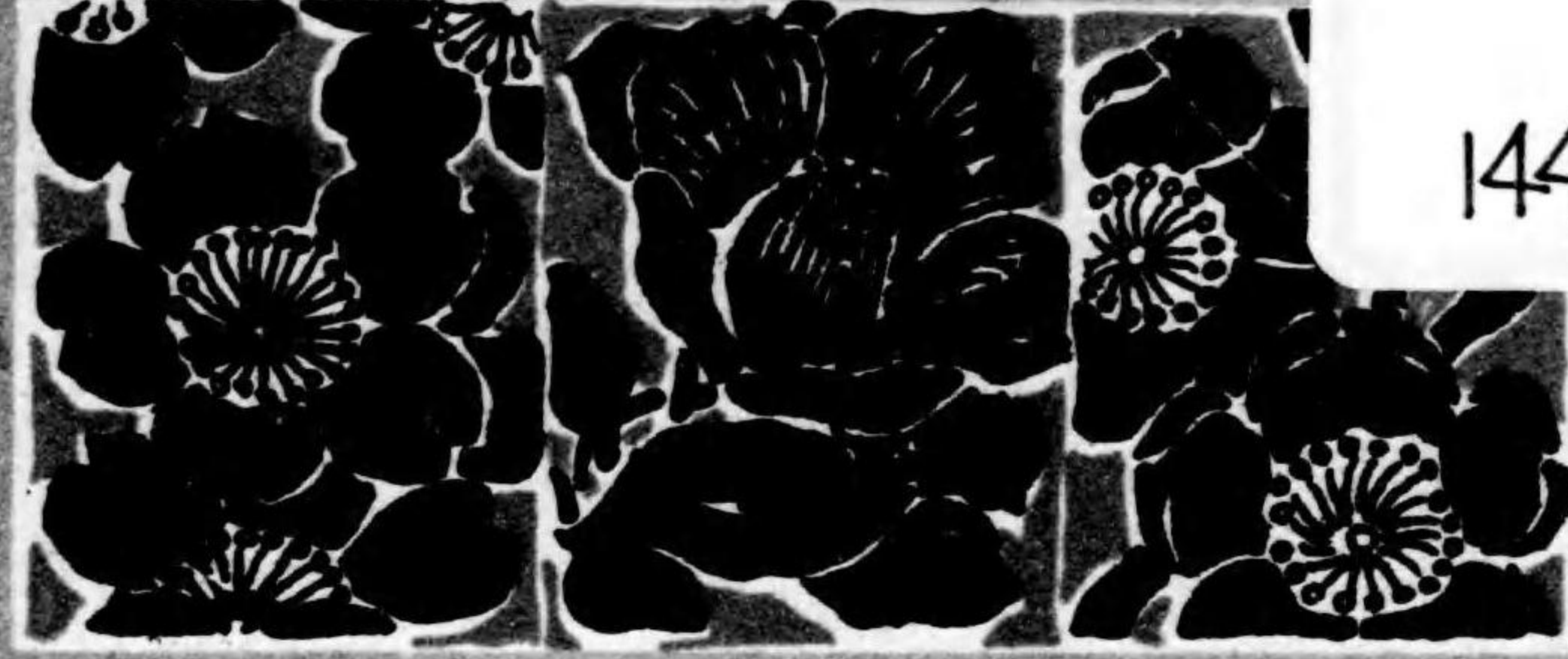


特106

144



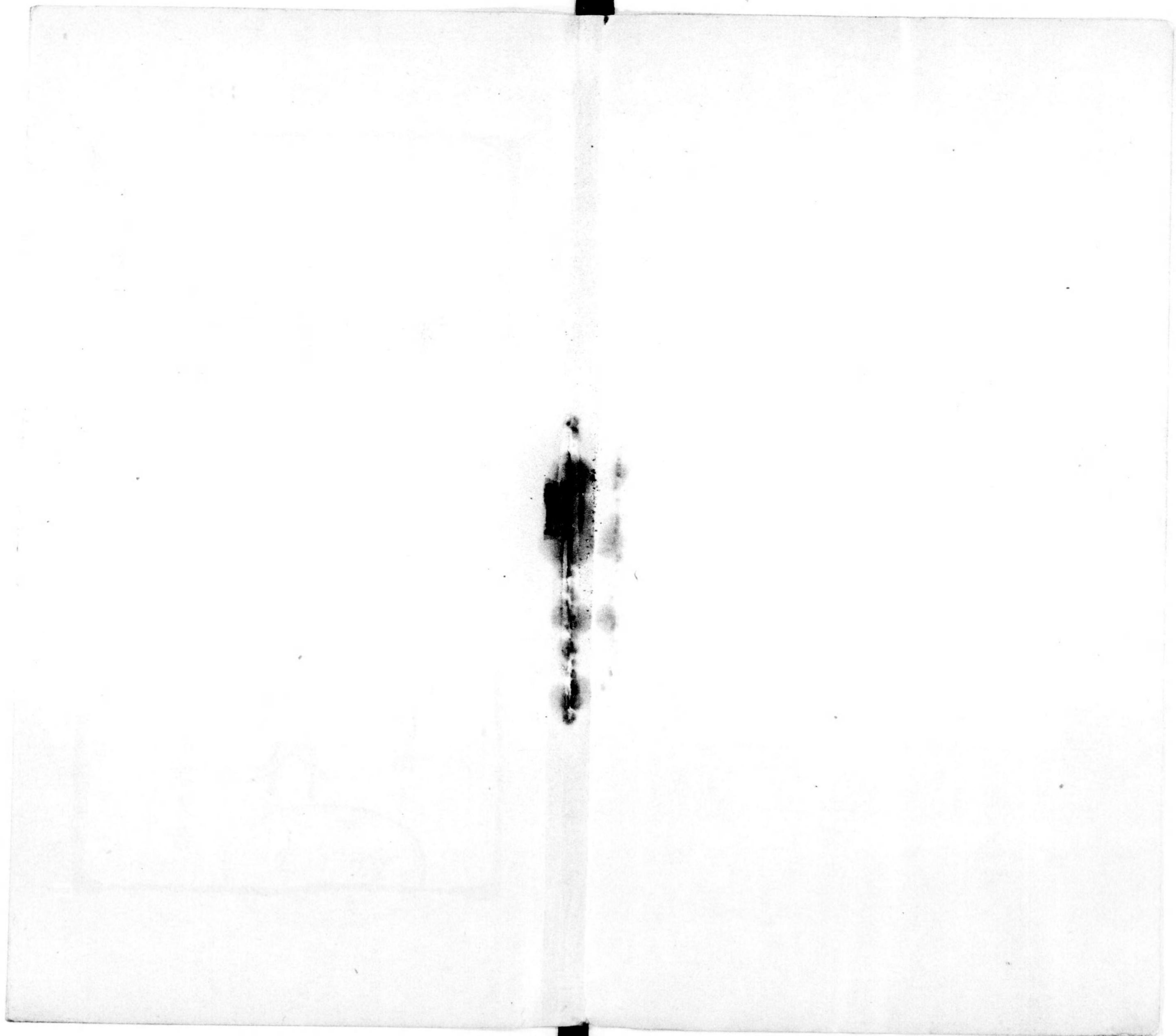
(再版)

子安花



始







横須賀鎮守府
東京灣要塞司令部
檢閱濟

みさ記案内

下里岬友散人著

大正
2. 7. 22
丙寅

(き さ み)

叙

國家は市町村の集團なり、國家の發達富強は市町村の發達富強に俟たざる可からず、市町村の發達富強を圖らんと欲せば、其地方の勝地、物産、總ての特技、特能を社會に紹介して、廣く外客を招致し、富を吸取する方法を講せざる可からず

三崎は三浦半島に於ける勝地なり、魚族の産出地なり、眺めて好く、漁して面白し、避暑に良く、避寒に良し、未だ廣く天下に知られざるを憾とす

(1)



知友下里君此缺陷を補はんが爲めに、『三崎』を著し以て天下に紹介せんとす予は其時宜に適したるの好著たるを悦ぶ三崎の天地之に依りて裨益する所尠からざる可きを思ふ一言叙とあす

千時明治四十四年八月

湘南楠ヶ浦の里

松島立麓

例言

一、本書發行に付て三崎町城ヶ島杉山要氏の助勢を得たる事多く、記事材料の蒐集に就ては三崎町仲崎松崎國松氏、其他を煩はした事が多い、茲に合せて記して感謝の意を表す。

一、本書の編著に際し自個の蒐集せる者の外、書籍として参考に供し或は拔萃したるもの左の如し。

相模風土記 三崎誌 東鑑 北條五代記 源平盛衰記 其他古事録數冊。

一、本書は遅くも七月上旬に發行する筈であつたが著者の身邊に俗務蝟集して荏苒今日

三崎町全圖



に至つた。此段疾く序文を寄せられた公正新聞記者松島立麓氏に深謝す。
 一、尙ほ本書記事の誤り又は本書に漏れたる材料も頗る多い事であろう、斯の如きは讀者の指教を仰ぎ改版の折を期して増補訂正する積りである。

四十四年八月

櫻の御所坂下にて

下里岬友散人

「み

さ

き

目次

三崎町の歴史……………(一)

(一)太古 (二)源頼朝時代 (三)足利北條時代 (四)佛教の渡來及交通 (五)徳川時代より明治維新に及ぶ

三崎町の沿革(現時の三崎町)……………(二)

名所舊蹟……………(三)

(一)櫻の御所 (二)桃の御所 (三)椿の御所 (四)海南神社 (五)歌舞島 (六)法満寺蹟 (七)小濱伊勢守景隆屋敷跡 (八)千賀孫兵衛某屋舖跡 (九)番所跡 (十)花暮町 (十一)八景原 (十二)光念寺の見晴し (十三)踏磯村 (十四)臨海實驗所 (十五)油壺 (十六)千駄矢倉 (十七)辨天窟 (十八)三浦陸奥守義同入道導寸之墓 (十九)三浦禪正少 義重墓 (二十)義士塚 (廿一)新井古城(六〇ニアリ)

城ヶ島村……………(四)

奇勝古蹟……………(五)

三崎曆

(一)海産物 (二)植物 (三)俗語俚歌集 (四)年中行事 (五)七崎

(五二)

交通上の設備

三崎町の各種建物

(六一)

三崎町の社寺

(六三)

(附 録)

- △三浦郡里程表 △旅箱 △三崎東京間遠船發着時間表 △三崎東京間遠船賃金表 △三崎東京間遠船時間表 △夏季晝航瀛船發着時間表 △晝航瀛船賃金表 △三崎繁榮組合規定
- △旅館案内 △三崎乗合馬車時間表 △三崎乗合馬車賃金表 △貸問案内

『み ぎ さ み』 目次 (終)

自序

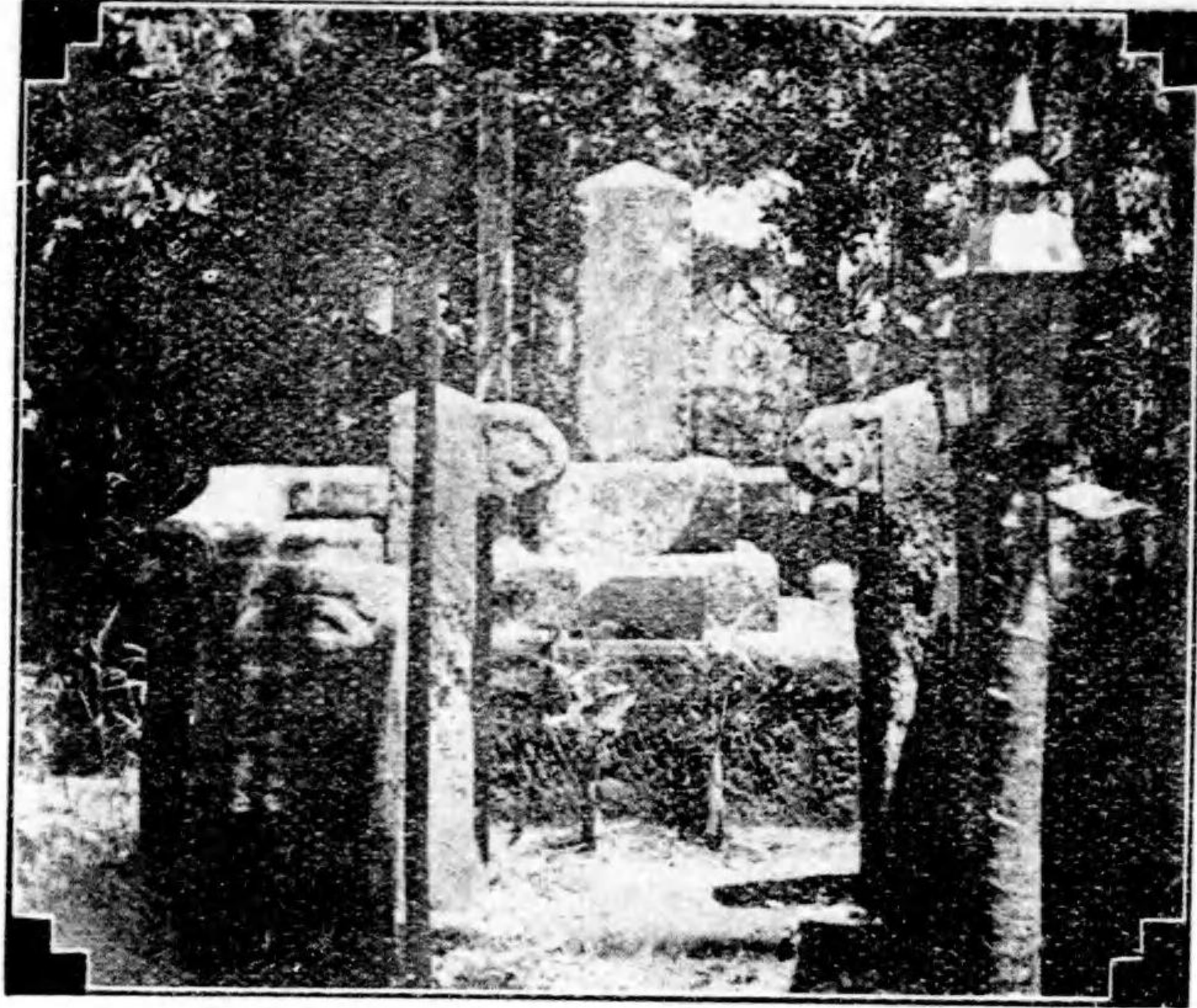
人は地により地は人によりて化せらる、天地自然の妙趣は茲にあり

三浦半島の南端にある三崎は、煙波洋々たる太平洋に突出して四圍の風趣人の俗勝を洗ふに足る、人之が爲めに集まり、地は之が爲めに開く、唯西漸に忙わしき明治の文明は、此孤兒を其發祥地に遺れて顧ざらんさす、之予が淺學を顧みず、此著を發行して世人に紹介せんとするに過ぎず

大正二年七月

櫻の御所坂下里岬友人散

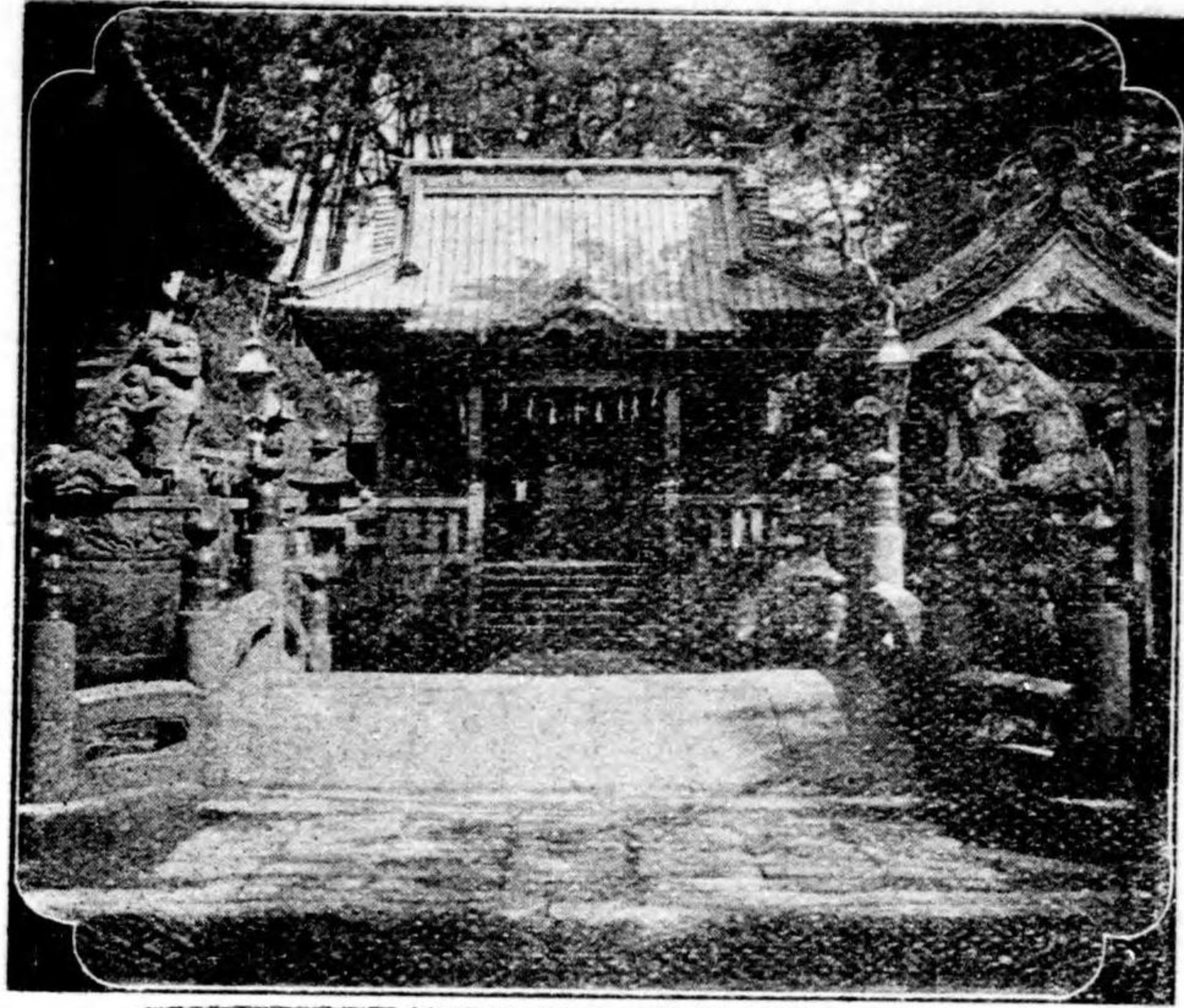




墓公意義郎次荒浦三代綱小



(松の垂水) 所名崎三



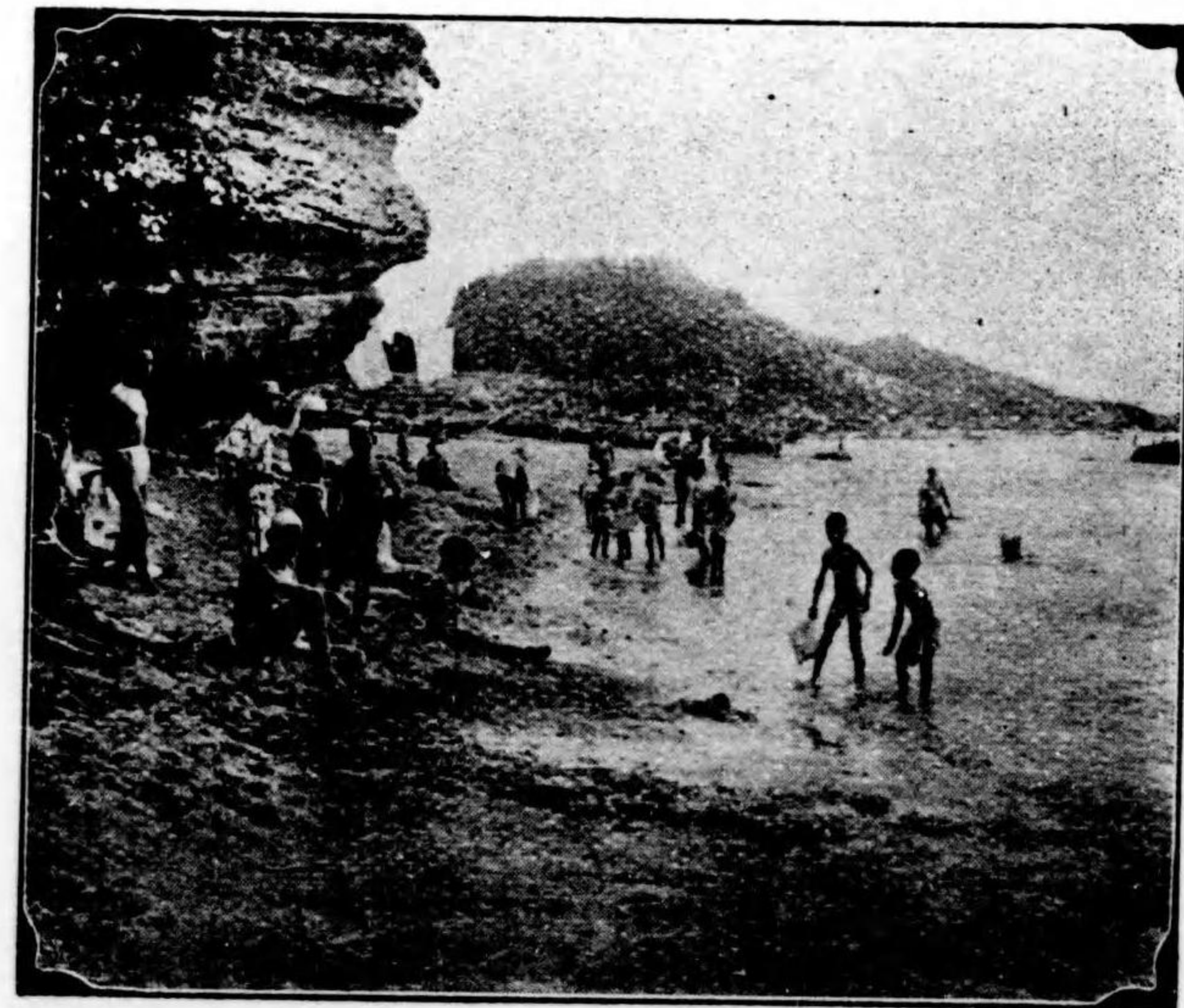
三 崎 南 海 神 社



三 崎 南 海 神 社 (夫 婦 公 孫 樹)



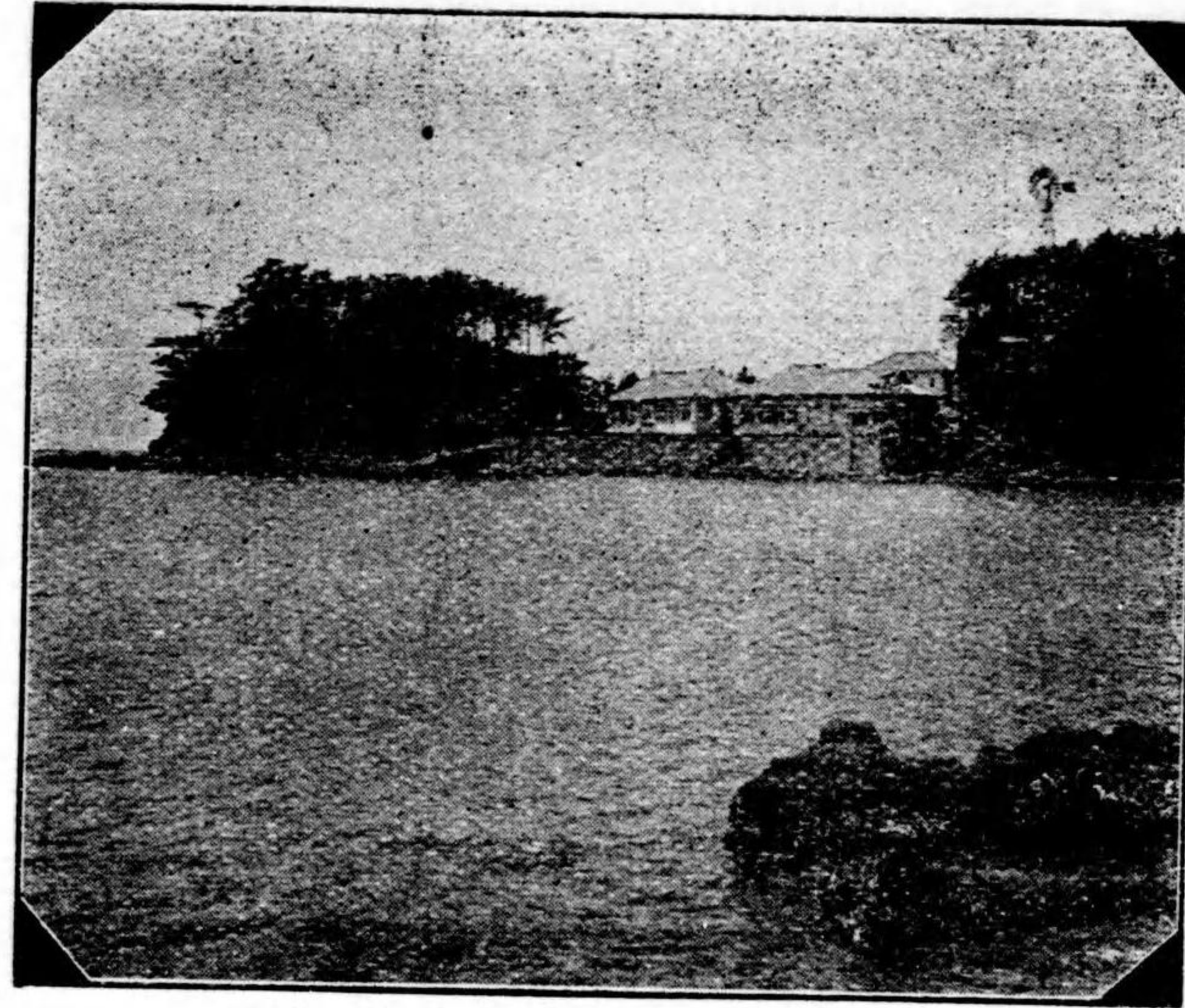
三 崎 名 所 (八 景 原 奇 勝)



三 崎 二 町 谷 海 水 浴



三 崎 港



小 網 代 陸 海 實 驗 所



三 崎 名 所 (櫻 の 御 所)



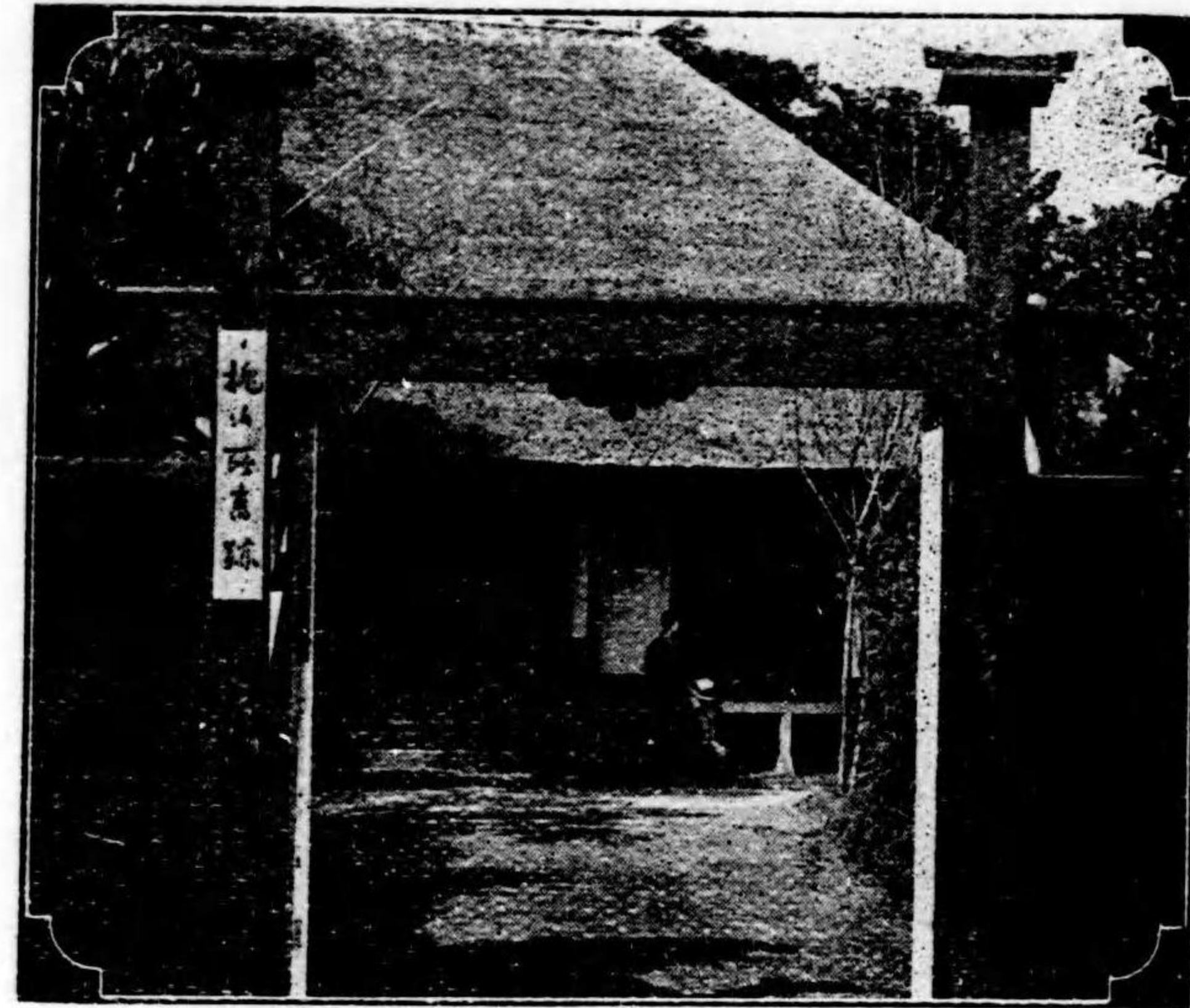
小 網 代 陸 奥 守 導 寸 義 同 公 墓



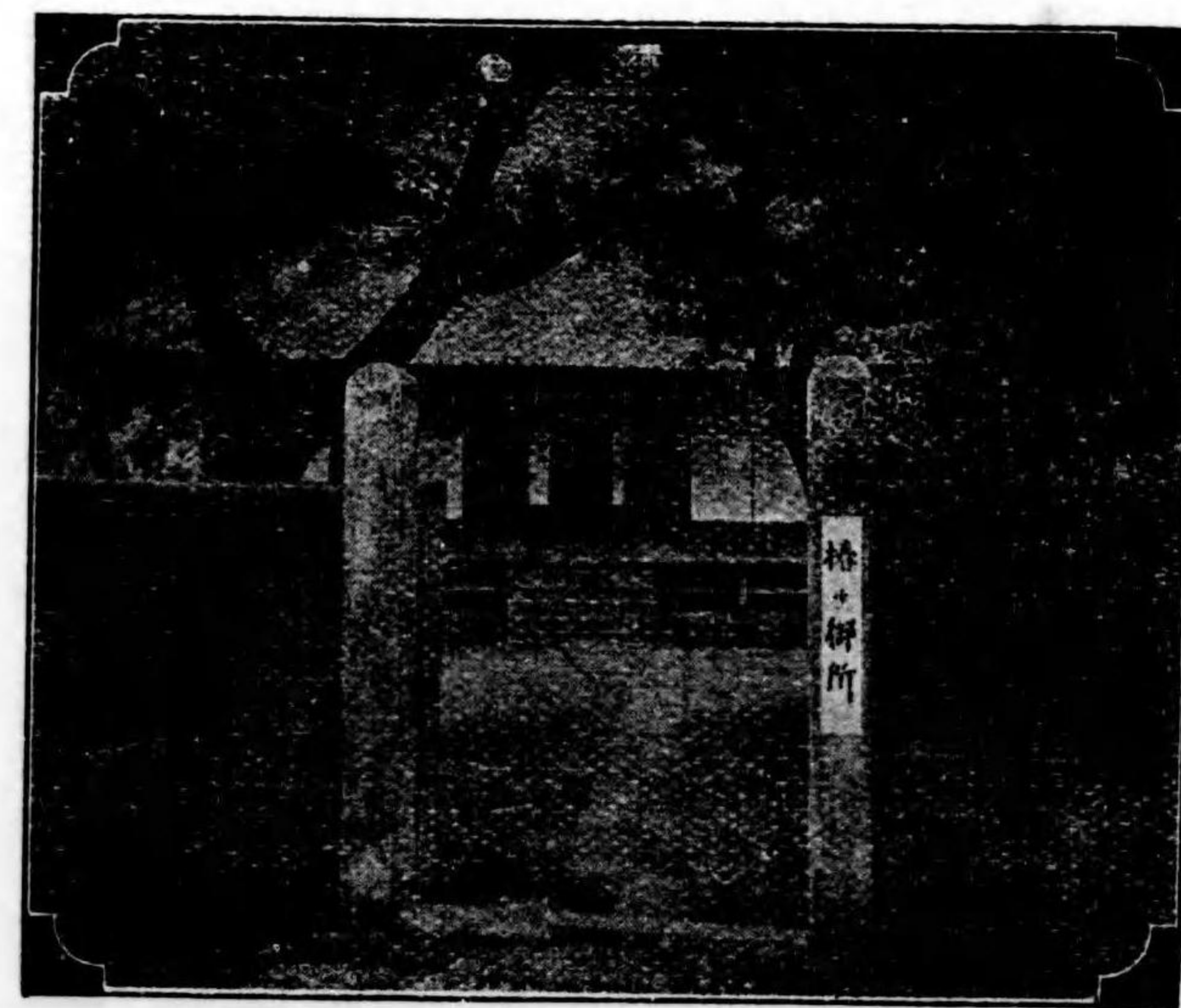
(矢り通) 所名崎三



(崎ヶ遊) 所名崎三



(所御の桃) 所名崎三



(所御の椿) 所名崎三

三崎町の歴史

古書に就て三崎を識れるは人皇四十五代、聖武天皇の天平年間の頃を始とす即今より凡千百七十年前なり勿論其以前にも遠く石器時代の住民のありし事は上の御堂、諸磯、小網代等に太古の遺物たる石器土器の破片を出し三崎町西の濱の丘より古墳勾玉壺等を發掘せるを以て證明す。

一 太古 日本紀元一四〇〇年頃

○天平年間僧行基

當時有名なる僧にして深く聖武天皇の尊信を蒙り時人より菩薩と唱へられ諸國に巡廻して布教に従事し神佛同体を唱道せり

と云へる者城ヶ島に來り神宮寺を建立せり今の薬師堂山は其遺跡なり。其より百二十年を経て、清和天皇の貞觀六年霜月朔日藤原朝臣資盈この地に漂着せりと

古書に見ゆ今の海南神社の靈は是あり。

資盈朝臣は九州大宰少貳藤原廣嗣の四代の孫にして鎌足公より五代の孫に當る惟喬親王と惟仁親王（清和天皇）の御位争の節時の大納言善男と云へる者左大臣源信の專横を惡み亡さんと企てありて資盈を語ふ資盈肯せ給はざりしかば善男怒つて資盈を讒す依て追討の罪を蒙り父子三人郎黨五十三人を七隻の船に分乘して九州を出帆し御嫡の船は房總に漂着し（今彼地にて鉦切大明神と崇めらる）資盈朝臣は今の三崎町花暮の岬に着し給へり（後に御座の磯と稱せるは明神着船の折、上り給ひし磯にして今小祠のる所なり）又口碑に曰く其御内室の船は城ヶ島に着けり其時船の楫を司りたる三郎と云へる者は今楫の三郎殿山と云はれて城ヶ島に祀らる資盈朝臣の上陸せられし時萬事周旋せし香能連（カノレ）と云へる者の系統は今日迄漁戸として花暮に存在す又神靈町（カノレマチ）と書せる町も現存せり。

當時房總の海賊三崎附近の民家を煩す資盈之を討ちて殃を徐き士民の尊敬淺からず同八年十一月一日資盈夫婦の没するや其屍を海に沈め祠を花暮の海岸に建ち本宮と呼び祭禮の時御輿を此處に安置する習あり。

二 源頼朝時代

日本紀元一八四五年頃
今より凡七百二十六年頃

三崎町の世に全く紹介されしは此頃にして好古の士に最も興味ある時代ありとす。頼朝公深く此地を愛し城ヶ島等の山々に盛に櫻樹を栽培し花を賞し宴を張り或は船を浮べて

涼を買ひ政務の餘暇を偷んで屢々御遊があつた、従つて眠れるが如き住民は立つて殖産の道を講じ釣魚の術も發達して遂に鎌倉幕府に魚を供給するに至り當年の面目を胚胎した。

東鑑に建久五年甲寅八月朔日二品頼朝三崎へ渡御し三崎津に於て御山庄を建てらる。年代を按ずるに由て頼朝が三崎に渡りしは此年始めてならん。

同六年乙卯正月廿五日渡御同廿七日還御正治元年三月頼朝、頼家渡御、建曆二年壬申三月頼朝家尼御前渡御建保三年三月渡御、同五年九月渡御安貞三年二月渡御同四月十七日渡御寛喜元年己丑三月十一日頼經將軍渡御同十九日還御同二年庚寅三月十九日渡御。と記しあり。

其の後正治元年も來遊し給ひぬ。實朝將軍三崎の櫻花御見物有るべしとて建曆二年壬申三月九日尼御臺所をともかはせ三崎へ入御し給ふ建保三年三月同五年九月安貞三年二月廿一日同四月十七日詩歌管絃の御遊を催し給ふ。扱又寛喜元年己丑三月十七日辰刻頼經

將軍三崎の礮山御遊覽のため出御し給ふ相州武州を初め御供するがの前司御船をもよふし海上にて管絃詠歌あり佐原三郎左衛門尉遊女を相ともない一葉にさほさして興を添ふ事しかも興あらずと云ふ事あし凡る山陰の風光、海上の眺望比類有べからずと賞めさせ給ひ同十九日に還御あり。同二年庚寅三月十九日將軍家三崎礮山の花盛り御遊覽のため武州六浦の津より御舟に召され海上にて管絃あり若宮の兒童等を召され船中にて詩歌を詠じ連歌をつらね給ふ相州武州以下參らる。依つて領主駿河前司異なる。兩國司武藏守泰時相模守時房基徳親行胤行を従へ秀句を献せらる。と云々。鎌倉數代の將軍三崎の御所に着御有て様々の御遊興のへ盡しがたく當地の景色すぐれたるを以て賴朝公を初め代々の將軍礮山花の季節を待ち兼ねさせ給ひ御遊覽をもよほされ毎年三崎の津へ渡御有て詩歌管絃の御遊屢ありき。

抑も此三浦の地が如何にして賴朝が管領に屬せしやと云ふに此地は一旦平家に組したる三浦家代々の領にして當時衣笠城の三浦大介義明之を知領せり（世に三浦翁助と申すはこの人

入「九才なりとも云ふ世評に三浦翁助百六つと云ふは誤なりん」

賴朝關東に兵を擧ぐるに方り野史の所謂、擧手一麾八州之十靡然で三浦家も孰れかへ黨與せざる可からざるに至つた。一日義明父子三崎町の海南神社に祈誓して神前に鶴會の勝負を試みたりしに赤き鶴が白き鶴に負けたるに由り白旗標の賴朝に加味せり其後平家追討の武勳に依り依然三浦の所領を許され別に恩賞して文治五年四月三日右大將賴朝より鐻流馬十騎角力十番競馬三番の寄附ありて例年之を海南社前に興行せしが三浦道寸の晩年に上宮田下宮田附近に移されし由、今に至る迄宮田の角力とて毎年行はれてゐる當時三崎の風光が如何に鎌倉武士の絶賞に叶つたかが窺はれる。

三 足利北條時代

日本紀元二〇三二年頃
今より凡五百十年前

元龜天正の頃と云へば四海波風荒く立ち天下麻の如く亂れて津々浦々の隅までも戦はせた戦國時代を想ひ起さぬ者はなからうされば斯うした三崎の小天地にも其餘波を受けて

太刀風矢響の音の物凄しい時もあつた。早雲と三浦家の戦、北條と里見の戦は、三崎を舞臺とする重なるもの、一二である。鎌倉三代を経て實權の北條氏に歸するや三浦家に事ありて北條氏と相争ふに至つた。

永正十一年七月十一日、三浦導寸小田原北條氏にやぶられて父子共に網代城内に討死す。

是れより相武の兩國北條の領知と成り北條三代氏康の弟北條美濃守氏親三崎資藏山に岩を構へ房州の大守里見安房守義弘を防ぐ是に依つて北條の城山と呼其の後甲斐信玄公三崎を嚙望し北條氏政の妹を四郎勝頼の奥方とし縁組相濟み其後北條氏に三崎を所望す夫より三崎甲州の領分なり三崎の堅めは山本勘助と間宮氏なり數年防備傳受の後信玄公の命に依り間宮氏三崎へ來り警固の任に當る則水主三十人信玄公より間宮氏に御預けあり夫れより永祿の頃迄間宮氏三崎を固む北條氏親は小田原へ引取る間宮居住の處を城と呼び間宮氏七十六年間守る其頃より向島へ番所を建て、二三人宛交代して島に渡り軍船を守備す其後其人々島に家作して居住す依つて城ヶ島と呼ぶなり。

北條五代記曰く導寸は至剛智謀兼備せし大將たりといへども鎌倉合戦に人數悉く討れ小勢なれば叶すして三年籠城す然に兵糧米つきはてぬれば城中の者共非常に難姦に及ぶ云々門を開き出て出討死すべきが腹を切へ

きか詮議し今生の名殘只今より酒を飲ん導寸盃をひかへ給ひければ佐保田河内守君が代は千代に八千代と歌ふ荒次郎扇を取て君が代は千代に八千代もよしやた、現のうちの夢のたはむれと舞給へば彦四郎も同く立てつて舞ふ實にあわれなる一曲なり時刻を移す共甲斐なしとて門を開て切て出づ神谷雅樂頭と名乗つて導寸を目がけ馳参し馬上ながら押並てむすく導寸に聞ゆる大力にて鞍の前輪に押付細首ヲ切て捨られたり。荒次郎は家に傳はる重代五尺八寸の正宗の大太刀を抜持て大聲に呼び切てまはる有様鬼神の如し扱又導寸は好きの道とて生害に至りて。

討ものも討るゝ者もかわらけよくたけて後はもこのつちくれ。

と讀み切腹し給ひぬ荒次郎は二十一才器量骨柄人にすくれ長七尺五寸黒髪あつて血眼なり手足の筋骨あらくして八十五人が力をもてり最後の合戦の爲滅し立たる甲冑は鏡をきたひ厚さ二分にのべ是を帯し白檀の丸木を一丈二尺につゝきり八角にけつり筋金をわたし此棒を引さけ一人門外にゆき出たる有様夜叉羅刹の如しオメキサケケ聲大山も崩れて海に入り地軸も折れて忽に沈む如し四方八方へ逃る者を追詰甲の頭上を打ば微塵に摧けて胴へにへ入横手に打ば一拂に五人十人打ひしく棒にあたりて死する者五百餘人其屍は地にみちて足の踏所もなし此威に敵皆恐をなして音遠巻に巻いたりける。手に立つ者もあらざれば自ら首をかき落し失せたりされども首は死せず眼はさかさまにさけ鬼髭は針をすりたるが如く牙を嚙しはり睨つめたる眼の光百鍊の鏡に血をうゝきたるが如く、うのねろろしさを一目見たる者必ず死すれば此頭又も見る人なし是に依つて有驗の貴僧、高僧に仰てさまゝの大法秘法呪せられれども其驗なし三年此首死せず小田原久野の總

世寺の禪師来て一首の歌を詠じたるものなり。

うつゝも夢さも知らず一子なり浮世のひまをあけほの空。

と讀みて手向たまへげ眼ふさがり忽肉朽て白鬚體成ぬ此荒次郎死所のあたり百間四方は今に於て田島も作らず草をもちらす牛馬其中に入て草をはめば忽死す故に賦までもよく知て其中へ入りし事なし常に青草茫茫と生たり當代の侍衆新井の城見物せしに尊才父子は名譽の武士一体とて城の大手の古堀の外にて下馬し休敬す此合戦と申は七月十一日なり今も七月十一日には毎年新井の城に雲霧たほひて日の光も定かならず丑寅の方と未申の方より電かゝやき出て兩方光入。風猛火を吹上光の中に異形異類の物有て干戈をみだし虚空に兵馬馳散亂天地をひかし戦ふ有様たろろしきこと云はんかたなし故に此古城のあたりにば人家もなし一里ばかり離れて村里見へたり導寸の討死は永正十五年戊寅の歲七月十一日の寅の刻なり。其後早雲三崎の城を收むるも雖も荒次郎の靈に犯され病を得て神佛に祈願籠めたりと云ふ。

これに由て見るに三崎町は一度び信玄が領に屬した。固より信玄は智勇兼備の將であつたから三崎を所望したのも房州里見勢に備へる策畧でもありしならん。其以前に城ヶ島に小戦があつた。

◎三崎十人衆

小田原北條氏分國の頃は海賊防禦のため十人の地士を置かる是

れを三崎十人衆と號す。

北條五代記に曰く永正十五年七月十一日三浦導寸討死し其時節出口五郎左衛門尉茂忠三崎の城に在しが一類の者共皆舟に取乗り三崎城ヶ島へ渡る。

早雲三崎へ馳來る此れ城ヶ島近く見へけれ其海を隔て船一艘もあらざれば攻べき様なし島よりは悉く舟を漕出し相模濱邊の在所へ働き海上は早雲の手に入らず然るに鎌倉建長寺、圓覺寺、兩禪寺和睦のあつかひ有て出口五郎左衛門尉を初め一類に龜崎、鈴、下

里、三富、此名字の中かしら十人早雲の幕下に依て三崎十人衆と號し前々の如く三崎に在城し早雲より知行を三崎近邊に於て一所に宛行る其後北條氏康公四男北條美濃守氏親天正年中に三浦を知行し給ひけれ共十人衆の田地はかわらず郡役をも三浦十人衆と號し一役に勤め來たれりと云ふ。

現今其内の鈴木、下里、三富等の姓名を有する者三崎町に住めるが其子孫あるべし。又出口の姓も存在せり。

今の城山は三崎町北條に在り其時代の遺跡にして永正の頃三浦導寸の築きし城ならん。

古書に北條早雲が築城せし如く云へど誤なり。

城廓を築きし其始は知る可からず永正の頃は三浦導寸の持城なり。

江の島岩本院藏文書日敵指詰之時於三崎要害一廟ニ戦功一被レ疵之條神妙也彌可レ抽ニ粉骨一之狀如件永正十年四月十七日智宗僧政氏華押接するに三崎要害を載するものは則當城の事なるべし五代記に據は此頃導寸の持城に一導寸滅亡の後早雲再興せり小田原記に導寸滅亡を永正十三年として早雲築城せし如く記しあるも誤なり。

弘治二年里見勢と北條方と船戦があつた。

管窺武將鑑には元龜二年の春と書しあるも當時里見軍の來襲屢々有之を以て年代明記し能はざるべし孰れにしても三百二十年以前の頃なり。

元龜二年春氏政と里見義弘と伊豆の三崎表にて船軍あり岡本左京亮頼元父隨縁齋と連被立一之手の船は房州海賊家也二の手の船は隨縁齋なり攻合半隨縁齋一の手の船へ助かる頼元は父の船を離れ小船に乘移り供船一艘相隨船飾をなくりて相印を重符に用唯二艘にて敵船の内飾宜く見ゆる大船に漕近鎌熊手引寄一度に飛乗敵を打殺し或は海中へ押落し我乘て來りし船を捨て水主揖取を其船に乘移らせ敵の船印を引入て味方の主符にしたる船印を押立四方へ乗付け相働く内味方助船もかさむ一の手の船軍も此仕様宜敷きが故に敵後行く云々。

關八州古戦録に弘治二年三月里見左馬頭義弘北條氏と合戦の時此地に陣取り事見たり。

里見義弘は十月初旬養息左馬頭義弘と總大將として兵船八十餘艘に乘り七里の海上を推渡り。相州三崎へ着船して城ヶ島に陣を取り此所には南方よりの番兵梶原備前守景宗全兵部少輔並北里刑部丞時忠等守り居りけるが急を小田原へ告たりしかば富永四郎左衛門政家山角紀伊守横井越前守加勢として馳せ來り互に船を漕寄て相戦ひ里見家利運に見へたりける云々。

城ヶ島は一旦里見義弘の些趾なりし事は事實に近くして島に残れる今の權作、僧ヶ谷は其遺趾なり。其後早雲は此處に兵船を置き山上に狼煙篝火を用意して敵軍來寇の防備固く横井越前守等に命じ天文頃迄警戒怠りなかりき。今の通り矢と云へるは其頃の戦に彼

れを取漕逃るを類に追詰められ船を棄て陸へ逃上る故に敵船十五艘奪取す此類の働岡本左京亮頼元也此故義弘負殿一身の猛威抽諸軍働之故數年積懐之遺恨を散するとの御感狀御召料具足を添て賜ふ。

小田原記曰く弘治二年(三百五十五年)房州里見義弘上杉と一味して兵船八十艘に取り乘り相州三浦へ押渡る三浦に有合ふ小田原家海賊梶原備前守を前として富永三郎左衛門遠山丹波守叫喚て切合けるに房州勢不叶舟に乘り漕ぎもどる小田原家三崎の城より追懸け舟に乘り移り打合ける汐に追はれ風に引かれて敵舟は引て行く云々。

我の矢の通り抜けたる所なるを以て名すけりと云ふ。

四 佛教の渡來及交通

鎌倉時代の佛教の隆盛は三崎と交通頻繁になるに従ひ此處にも輸入されて現今の寺は此頃の建立に係るもの頗る多し又應永十年八月三日(凡る五百年前)吳の國の船二隻風雨の爲に當港に漂着す。

永樂錢數万貫を積めり、時の將軍足利義滿は鎌倉管領左兵衛督滿兼に命じて船より錢を上げさせ是より永樂錢關東に流通せり(永樂錢は明の太宗の永樂)爾後唐船との交通大小なく當港に行はれたる形蹟あり(小田原記)永祿九年の春三浦三崎の浦へ唐人着船錦繡織物種々の焼物沈香珊瑚琥珀の玉あらゆる賣物を持來る其頃關東富貴にて悉く諸人買取賣買の利を得て歸國しける云々。

天正四年の比ほひ三管と云ふ唐人民政の虎の印判をいたとき、唐國に渡り三年目の戊寅

七月一日に黒舟三崎の港に着岸す唐人此港を見て黒船千艘つなぐ其瀬はかられず凡そ唐國にも有るべからずといふ。民政の檢使として安藤豊前守といふ人三崎へ來り唐と日本の交通出合賣買の件ゆゝしく見へける。

斯る治亂定め難き世にも三崎の風光の忘れ難きか北條氏の時代に遷りても一門の公達宗徒の輩屢々此處に御遊ありけり。

北條氏康三崎島山櫻花御見物の御催し有るに依つて伊豆相模の船共悉く小田原の浦にかゝる氏康氏政御船にめされ御共の人には海陸より海浦御遊覽のため渚にりひて舟をうかべ浦々を漕ぎめぐり陸地を御供の人々は濱づたひ舟と陸と言葉をかわし御興の御遊あり凡る濱の浦々には千艘万艘の舟をつなぐといふ。其瀬は計られず水底深くしてたぐひなき港唐國までも聞わたり。

五 徳川時代より明治維新に及ぶ

此頃の沿革として特筆大書すべき歴史を見ず慶長元和の頃大坂夏冬御陣の戦に敵の下向警備の爲め徳川氏三崎の間宮家に命じ此地を固めしぬ。

一、慶長五年關ヶ原御合戦の節間宮家手柄有之御感を蒙る。

一、慶長十九年冬大坂御陣元和元年夏同御陣兩度ともに海濱取締として三浦三崎を御固めなり。

一、間宮寅之介

陣所

城村なり

一、向井將監

陣所

中屋敷あり

一、小濱民部

陣所

今の光念寺あり

一、千賀孫兵衛

陣所

今の本瑞寺なり

右の通り警備の上兵糧を運送するに當り大坂の番船供右兵糧を奪はんと來りしを追掛け

逃行く船の身繩を間宮寅之介雁股の矢にて射切敵船に乘移り一番に千賀孫兵衛三番に間宮寅之介大坂の番船を乗取高名あり。

一、大坂落城の後海防方不殘江戸詰を被仰付三崎を引拂と成され其時高千二百石にて

水主の扶助成兼るに付御拜領地城村に水主三十人被殘置きけり。

一、右三十人水主御用無きに付き諸魚を釣り江戸表へ送る事を初めたり。

この間宮家と云ふは武田信玄の舊臣にて七十六年間三崎町を知行せる家柄にして其記録頗る多きも今其部のみを摘録す。

一、天正十年武田勝頼甲州天目山に討死して武田家亡ぶ此時間宮駿河をかたむる處東

照宮大久保七郎左衛門忠世を以て何者と尋ねらるれば間宮造酒之丞と返答申上何卒御

目見に致度く御執成被下度様相願ふ依之其後天正十一年遠州濱松の御城にて御目見

ね相濟みたり。

一、天正十二年織田中將信雄公と羽柴秀吉公確執の時東照宮信雄へ御加勢有り尾州小牧

山へ出張し給ふ大坂方瀧川左近將監一益牧田與十郎を語らひ六月十五日の夜三千余騎にて遠州掛塚へ押寄る東照宮聞召し一騎掛に御高を出さる附添ひ奉る人々は井伊万千代丸直政大須賀五郎左衛門康高榊原小平太康政本多平八郎忠勝皆々追掛瀧川が船へ乗込む此軍に間宮信高松平新助忠總討死す此時間宮の奥方は向井將監殿より聞入れたり信高討死の後城村にては此奥方を大切に致す間宮家の寶物中の玉の宝箱を三崎海南大明神へ献上し七日間斷食にて何卒間宮の相立する様に御心願あり。夢中に間宮寅之介軍場へ出ば早速家建べしとの御告に依て水主頭谷口金兵衛寅之助を懐にして戰場に趣く。

東照宮より大久保七郎左衛門忠世を以て御尋ねあされ合戦の場へ幼少の子を召連れられたるは何者成りと御尋ね遊たれば谷口金兵衛と申者にてありたり信高は掛塚の合戦に瀧川と討死し未だ瀧川存生の由なれば。なつかしく存じ親の敵瀧川を討ち度くと申したるに付き是迄で参りたり則信高の倅間宮寅之介と申者なりと申上げれば公不惑に思召千

二百石を給ひ間宮寅之介高乗と名乗り間宮家を相續すべしとの上意を蒙り間宮家相立けり水主三十人の者どもは千二百石にては切米相渡し難き故御用の節は御用相勤め不斷は漁業を渡世と爲す可き旨間宮家より申渡されけり。要するに徳川家康天下を統治してより十五代三百餘年の間は三崎は無事平穩に過ぎ商業漁業の進歩著しく殖産開發の時代なりとす。著者が蒐集せる年代記様のもの二三を擧げん。

- 一、三崎船大工の沿起は右水主供相談の上須屋九兵衛と申者を呼下し船を作る技を治左衛門と申者に究めしめ夫より所々に船大工出來たりと云ふ。
- 一、江戸小田原町肴問屋へ水主の者釣上げたる諸魚を送りたる所其の時は諸魚澤山に上りたるに付皆々百姓をやめ漁師と成り夫れより漸々人数多く相成りし故三崎田畑を屋敷に致し城村よりは西の濱或は三崎、或は城ヶ島へ渡り又は右の村よりも城村へ移る者も有り皆々漁業を渡世とせり其頃伊勢國より海士四五人下り向ヶ崎に住宅す勝手悪

しき故城ヶ島へ渡り居り依之向ヶ崎海士の居所を海士ヶ崎といふなり。

一、正保の頃和泉國より香海屋長左衛門星野權兵衛新明八左衛門三人連にて城村へ來り八左衛門は西の濱二人は城村に居住し小買と申す事を初め諸魚を買取り江戸の間屋へ送る事を初めたり。

一、萬治の頃より鯉鮪を釣るを初め其時餌の鯉を籠に生け引きあるきつゝ漁を爲せり其時城村に山田善左衛門といふ者有り船の内にかめをはり海水を取り餌の鯉を生くることを初めたり其船を龜甲丸と名付く。

一、益三日の中休の事初るなり。

一、寛文の頃湯淺與兵衛と申者中の町にて小買を始む。

一、延寶二寅年江戸小田原町と武州本牧金澤領相州三浦領拾七ヶ浦争論出入訴をなし金六千兩拜借して本材木町にて材木屋を肴問屋に御取立新肴場と名付け直ちに送り居たりと云ふ。

一、天和元年より京櫻傳右衛門城村を請浦に至し西の濱は相模屋紋三郎直賣致したる事京櫻傳右衛門方年明たる故中の町湯淺與兵衛大和屋彦右衛門兩人にて城村を請浦に致したり城村惣百姓の御屋敷へ御奉公に役金を差上げ一割船二艘を湯淺與兵衛漕ぐなり

三崎中の肴荷を積み江戸へ通船を始む。

一、元禄年中迄三崎中名主は湯淺與兵衛一人なり當時三留源仁右衛門地方代官たり。元禄八年湯淺與兵衛退役し東の町へ轉居し湯淺與治右衛門と改名す。

天野彦右衛門名主と成り是より三崎西の町、東の町田畑を切替屋敷とし皆漁師と成り高は三十六石あり彦右衛門退役後町に名主あらず。

一、元禄十六年の大地震に最福寺御堂ゆり崩され上の山へ易地御預け相濟引移る其の跡へ城村より人集り家作して居住す今も猶其所を寺屋敷と稱す。

一、寶永の頃西の町和泉屋四平城村の一割船を漕きたり。

一、城村、西の濱元禄年中房州海士津五十六ヶ村と鮫細出入又々出入とあり長井より西

の浦は不殘此出入に同心す。

一、寶永二年松輪と出入し、證文を取替せ、又々毘沙門とも出入す。

一、三崎西の濱、城村、西の町、花暮、磯崎、中の町、東の町、城ヶ島は東南の海に面

し東より千田より西より江の島まで漁村打ち續く。

江戸時代より今日に至る迄三崎の魚類と云はゞ日本橋にて其聲價を失せざるは偏に此頃

よりの賜なり。町に就ての政務は慶長の頃より始まる。

三崎番所は慶長十九年小笠原、藝守信盛暫く守衛し同廿年向井左近將監勝此地を領し

番所守衛を督す後三崎奉行を置き之を管せしむ其交替は正保二年九月より承應三年こ

阿部治郎兵衛吉成在勤十年万治元年六月より寛文三年十二月まで松崎權兵衛吉次在勤六

年寛文四年正月より同十一年十一月まで山角藤兵衛勝平在勤四年延寶三年九月より同四

年正月まで土屋權十郎某延寶四年二月より同八年七月まで在勤河田六郎左衛門親純天和

元年八月より元祿三年七月まで在勤十年山岡傳五郎影忠元祿三年八月より同八年十二月

まで在勤五年根來五左衛門阿部吉成より山岡影忠に至る間地方の事務皆奉行の兼ねる所

かりしが根來氏に及で地方は代官の所轄に移る此地に奉行を置く五十年にして廢す番

所亦豆州下田に移り享保五年再び浦賀に移る是より先き元和二年豆州下田に番所を設け

江戸灣入口の船舶を検す其出口の船舶は三崎に於て監檢せり三崎寶藏山陣屋は文化八年

三月十一日浦賀奉行岩本石見守代官大貫治右衛門手代等測地丈量をなし會津藩士森山隼

右衛門、岡田丈右衛門、佐藤五八、松原傳十郎等工事を督し閏六月竣功す在營の士卒足

輕八十餘人物頭一人之を統督す。

大津の陣屋は天保十四年川越藩主松平大和守預り領の時建置す弘化年間廢撤す安政七年

熊本藩主細川越中守預り領の時再び陣營を置く。

上宮田陣屋は弘化三年より彦根藩主井伊掃部頭建設したる所にして同時三崎の東岡に出

張し陣屋を設く宇都木六之丞郡奉行として茲に居す嘉永七年長門藩主松平大膳大夫預り

領に移り藩士等皆上宮田三崎等に在營し熊本藩士は大津に在營す會津藩主松平肥後守所

領以來熊本藩主細川越中守預り領に至る迄五十二年間は外寇防禦攘夷論旺盛の時代に
 して徳川幕府の政略亦一に江戸灣の守備に急かり故に文化八年會津藩所領の時より熊本
 藩預り領（長門藩の時より領地と稱）に至るまでは常郡沿海の防備大藩の警衛する所たり安政
 五年開港の議漸く幕府顯要の有司間に行はれてより稍弛廢に赴く後佐倉藩松本藩等の津
 久井村に在營ありしと雖も海岸の警備に關せず當時沿海の砲壘の如き早く既に頽廢に歸
 せり。

慶應四年代官江川太郎左衛門の支配所たりし時鴨居に陣營を置き町村の草高百石毎に一
 人の農兵を徵募し訓練せしめ觀音崎砲臺を受持ちて警備す、當時江川氏は洋式操練を以
 て幕府有司の間に著はる故に佛國兵制に倣ひ兵を民間に徵したり幾もかくして維新の擾
 亂とあり此事止む。
 明和寛政の頃より内外漸く多事となり外國船の來航急なるに依り海防論盛に唱道され城
 ケ島に砲臺を設け烽火臺を置き外船の擊攘に供へり。

文化年間に至り屢々外船の來航に會し海防の議漸く起り當郡沿海各地に砲臺を築きたり
 後安政年間海防の議稍々弛み安政五年開國の後には終に廢撤せり烽火臺城ケ島安房崎にあ
 り慶安元年建置し享保五年廢す其裝置及材料左の如し。

高サ一丈五尺 幅一丈 下積松枝、上積茅葦支配材落よし心木松を用ふ 外圍竹
 遠見番所は享保五年城ケ島に建つ同六年暴風の爲に破壊し後久しく置かず。
 安房崎砲臺文化八年六月起工會津藩士田邊半兵衛工事を督す。大砲三門を備ふ砲壘内廓
 東西九間南火藥庫へ十六間立退へ十三間文化九年十月廿日より毎月二十日を定日となし發
 北十三間火演習を行ふ又三崎寶藏山に陣營を建て海岸に常置し船頭は沿海村々の名主又は船主等
 を擧て之に充つ水夫は漁夫船夫を徵發せしなり。

- 一、遊雲丸 兵庫形船 水夫十四人
- 一、飛鳥丸 小早形船 水夫十人
- 一、凌波丸 押送形船 水夫十人

一、黄龍丸
外豫備船二艘

伍大力形船

水夫十人

水夫百四人

右等の船を用ひて毎月三回小銃發火演習を行ひ徵發の水夫は日給二百文の手當を與へ船頭に擧たる名主船主等は多少の年俸を給し士班に列せしめ苗字帶刀を特免せり。

三崎町の沿革

三崎は郡の南端にありて相模灘に向ひ當郡季候温暖の地にして嚴冬積雪を見る事稀かり古は御崎と書ると云ふ當郡に於て民族の居住久しき地と稱す。
天平年間僧行基の城ヶ島に神宮寺を創建したる如き貞觀六年藤原資盈(祭海南神社)漂着の時香能連戸さなりて存す。なる者既に土豪を以て割據したる如き部落開起の久しきを知る可し數世を経て久しく三浦黨の所領となり足利氏の後永祿年間に及び北條氏の幕下三崎

十人衆及び山中彦十郎等の來地たり天正十八年向井忠勝間宮高則等の采邑となり正保年間に至る間近隣城村、向ヶ崎村、二町谷村、東岡村、仲の町、岡村、原村宮川村等は未だ一村を成さず元祿年間始めて各村々名を附す後數年間三崎奉行の所管たり此時近隣の部落は概ね徳川氏旗下の采地に屬す、文化八年三崎を東西二部に分ち西部を分郷と稱して松平容衆の所領とす。東部を公料と稱し明治維新の時に至る迄浦賀奉行之を管す。
分郷及他の分落は川越彦根萩熊本佐倉松本等の諸藩相遷替して領する所たり。
慶應四年代官江川太郎左衛門之を管轄し明治初年一時葦山縣の所轄となり明治二年神奈川縣管轄に移る明治廿二年町村制の實施に依り三崎町、城ヶ島村、六合村、諸磯村、小網代村を合して三崎町と總稱す是より前き明治九年地租法の改正に當り其界堺の犬牙錯雜あるを以て向ヶ崎、宮川、原、東岡、仲町、岡、二町谷の六村を合併し六合村を建て城村を三崎に合せて宮城町と稱し明治十二年三崎の小名を日の出、入舟、仲崎、花暮、海南、西野、宮城、西濱、の八區域に分域に分ち三崎町と公稱す。明治廿六年の調査に

依るに戸數千二百十二戸人口八千九百九十二人此地は三崎、網代兩港あるを以て商船の出入浦賀に亞て頻繁なり。三崎港毎歳入口の船舶汽船六百六十艘此噸數壹万四千五百噸風帆船六十五艘此噸數四千五百噸日本形五十石以上船三千三百五十七艘此石數百二十一万二千五百石小網代港は汽船二艘此噸數七十五噸風帆船三艘此噸數三百十五噸日本形五十石以上船百廿五艘此石數二万五千六百八十七石二港俱に其出港の數亦之に準す。三崎は古く漁業を以て著る其業往時に比して稍々衰へたれども近來交通漕運の途相開けたるに依り漁業も從て進歩の徴を來たし郡中第一の漁場たり唯人口の増加に従ひ無資産の漁民年々其多きを加ふるを覺ゆ海岸の眺望は東は房總の諸山西は遠く伊豆の天城箱根等の峻嶺を望み富岳は遙に雲際に聳へ海水縁に奇巖峙ち勝景の地あり、夏時海水浴客來遊する者多し應永十年八月明船の着岸あり其積載する所の永樂錢足利滿兼に與へて關東に通用せしむと云ふ(武家盛衰記)

現時の三崎町を論ず

三浦半島の南端たる吾が三崎町は前面に洋々限りなき一大漁場を控へ後方には需要殆んど無盡藏なる帝都を有せり以つて古來より漁船の集散地として亦生魚の一大問屋たるやの觀を有す從來漸次發展向上し來りしと共に將來更により以上一大發展す可き機會に遭遇しつゝあり矣。

元來當地の生業別に就いて見るも人口九千八百九十三人、戸數一千六百戸、中農業四百〇五戸、漁業七百六十四戸、商業三百四十戸、工業六十一戸、雜業三十戸を數ゆ、農業は暫く惜き同地の生命は實に漁業に在りと謂ゆ可く其他の商工業は漁業に附隨して生活し居ると云ふも差支へなき状態にあり、されば漁業の振不振は直ちに同町一般の景況に多大の影響を與ふるが如き其一斑也。

而して當地は漁業地たると共に各地漁船の集合所たり看よ何れの日か房總、及伊豆地方

の漁船が寄港し居らざる事なし之れ當地に附與されたる天然の地形が然らしむる處なり
とば云へ又以つて當地が運輸上好都合にして生魚の輸送を爲し。餌料を購入するに便
るが爲ならずや。然して各地共漁船に大改良を加へ多く石油發動機船を使用するの結果
海の寶庫は自然に開發され當三崎港に於て獲する魚類のみにても實に一ヶ年四十萬圓の
巨額に上る現況也。

生魚の輸送機關としては東京灣汽船會社あり三浦共立汽船會社あり共に三隻宛の汽船を
以て従事し居り當地より松輪。岩浦。下浦。浦賀を経て東京に達するを以て、僅かに五
時間にて帝都の市場に現はるゝ爲め盛夏の候と雖も臺も腐敗するの憂なく市場に出で
も頗る美味ありとして歡迎さるゝ有様あり。尙ほ目下は避暑客多き爲めに東京灣汽船に
ては一隻の汽船を増發して旅客の便に供しつゝあり。
從來斯の如く各地漁船の集合港たりしと雖も尙ほ且つ暴風の際には波濤高くして寄港船
は安全たるを得ず茲に於てか消極的なる當町民も大に覺醒する處ありて、三崎築港の計

畫を起し最早測量も完成したれば築港の完成は尙ほ二三年の後ある可し完成後の當港は
非常に漁船の輻輳するは論を俟たず。然して町民の之を遇する道の如何に依つて當町盛
衰の岐るゝ處なりとす。

故に吾人は此機を利用して町民に向ひ大聲叱叫警告を與へんと欲す、警告とは何ぞ他なし
町民の外來客を優遇するの途之也。

故に避暑客避暑客を出來得る限り優遇して之を吸收すると同時に亦大いに寄港漁船に對
し誠意を以つて迎へざる可からず即ち寄港に便宜を與へ精選せる餌料を出來得る限り安
價に供給し生魚の輸送に對しても又全力を盡して迅速至便に取扱はゞ當地は期せずして
より以上の大發展を爲す可く従つて町民の利益は多大なる可しと信ず敢へて後進黃口の
吾人が論議するは當町前途を想ふの餘り而已。

名所舊蹟

1 櫻の御所

日の出町の丘北條山に在りて本瑞寺は其舊趾なり其昔の面影を停めず其名程の者に非ずと雖も遠眺の山様水態は暫く杖を駐めて吟稱せしむる價あり試に苔蒸せる傍の老松の影に立つて臨めば右方に城ヶ島の安房崎が嘴の如く海に突き出で左に通り矢手斧山の奇礁點々として港口を扼し時に金帆あり銀帆あり漁舟三々伍々有より無に入り無より有に隠顯す。遠く煙波を隔て、翠巒起伏するは房州半島なり。建久の其昔頼朝公此處に酒宴を展べ城ヶ島一帯の島櫻を賞し小笠懸等して遊びしと聞きしが當年の有様を思ひて懷舊の情切あるを覺ゆ。

頼朝が山庄を建てられたるは此處ならん、三浦導寸討死し北條早雲が此所に城ありしを改築して居城せり故にこの山を北條山又は城山、陣屋山とも呼ぶ、古名寶藏山とも稱せり。城址の界域は不明なり。山上に海光山本瑞寺あり。曹洞宗にして本尊は地藏尊(長さ九寸五分)(弘法大師の作)開基は三浦荒次郎義意、位牌の法名大藏院殿玄心

安公大禪門

寺は元、上總久留里四覺寺の末なりしと云ふ中興の開山は文廣なり(寛永十六年五月十五日寂す)鐘樓は天和二年に懸る。この地は中古小濱氏の屋敷となれる由。

2 桃の御所

(三崎町二町谷にありて鎌倉幕府の頃桃の御所の遺蹟安置す。)

今見桃寺として残れり

紫陽山と號し臨濟宗にして京妙心寺の末なり本尊は阿彌陀、開山は白室(萬治二年十二月廿六日卒す)開基は

向井兵庫頭正綱あり。

寺内位牌堂あり觀音 向井正綱の肖像を置く。

向井正綱之墓

見桃寺殿天慶玄龍居士寛永甲子年三月廿六日彫れり。

寛永譜には正綱寛永二年三月廿六日六十九歳にて死す天溪玄立と號す見ゆ。

向井兵庫頭正綱屋敷跡

今の最福寺地是なり正綱は武田勝頼に仕へ武田家没落の後處士となり其后召れて東照宮に仕へ奉り豊臣秀次により船三艘を贈りけるに其内よき船を撰ばれ、國一丸と名付られ正綱に預けられたり天正十八年相模上總

の内にて采地を加へられ二千石を知行し附屬の士及び輕卒五十人を預け給ひ此地を警衛す寛永元年三月二十
六日六十九歳に死せりと云ふ。

3 椿の御所

(入江を隔て、向ヶ崎にあり)
金剛山大椿寺が境内にある)

大椿寺は舊蹟なり邸内清酒として裏の大椿寺山の小松が濱風の聲涼しく覺ゆ。

「大椿寺は金剛山と號す臨濟宗(古は鎌倉建長寺の末なり中興聖悦のとき)
本尊は十一面觀音を安す開山は旭永(天福元年正)と云ふ。

開基は妙悟尼なりと云ふ(法名大椿寺法圓妙悟尼寛喜三年正月廿五日逝去す宮川村に墓あり寺記に妙
悟尼は頼朝の室なりと云ふ頼朝の夫人は政子にて事實卒年等も符合せず)

こは全く鎌倉の侍女にて後剃髮し此地に住せしものならん寺傳は附會の説なる可し。

寺傳には此地は妙悟尼住せし所にして園中椿樹多くありし故世俗に椿の御所と稱す後一
寺となし大椿寺の號を授けしと云ふ今も境内に椿樹兩三株あり。

威徳堂本尊は智證作(長九寸)

4 海南神社

(濱船發着所より一丁許りに在り)
加以奈無美夜宇自無也之呂。

社は南に向き居るを以て海南と稱す。

俗説

昔輪廻船にて流寄る神あり然る處隣村原の者海藻刈に出て見付是を取上げ奉りて海難神と崇む
とあり。

三浦一郷の總社にして社殿輪奐の美なしと雖も境内老杉古松鬱蒼として寂然崇高の氣に
滿つ。藤原朝臣資盈の靈を祀り神体は束帶の座像(長一丈、横五寸)なり。神寶末社頗る多し。
幣殿拜殿 正一位海南大明神の額 社の銀杏樹を神木とせり。

神寶 1 劍 一 振 資盈所持の物と云い傳ふ。

2 丸 穴 具 一 箇

3 石 一 顆 一 箇 間宮虎之助
高則寄附

4 假 二 枚

5 神 樂 殿

6 神 橋

御手洗池に架す寛永十七年向井將監忠勝造る。

擬寶珠の銘に相州三浦郡三崎郷海南宮神前橋向井左近將監忠勝、身宮、安泰壽命遠大祈念之故造焉寛永十七
庚辰九月吉日按に身宮の字誤あらん。

7 末 社

伊勢兩宮二十一社合殿。御靈。金毘羅。疱瘡神。稻荷天王。海功明神合社。

八幡船玉合社。八幡山にあり向井忠勝勸請す。

本 宮 海南明神の舊地なりと云ふ。

龍 神 社

稻 荷 社

又寛永十七年庚辰向井左近將監忠勝當所にて安宅丸の御樂船難風に逢けるを此の御神を
祈り順風を得たり依つて境内に池を堀らしめ橋を渡す、擬寶珠に其銘あり御供田向ヶ崎
の内、田尻村に有御朱印五石金田村より納む。

5 歌舞島

(町を中心より西に面し二町谷の濱になつて居る)

二町谷の濱を通稱し島にあらず又兜島とも呼べり兜とは此處の小丘が兜に似たるを以て
稱す歌舞島とは一説に頼朝譜代の官僚が酒宴を敷き待女白拍子等をして舞はしめ長樂の
興を添し所なりと古書に又鎌倉の僧が佛會を開き讀教歌舞せしが故ありとも見たり。
丘に連る深瀬淺瀬は三崎町第一の海水浴場として東都の騷客に愛顧せられ夏朝は海水帽
の多く此處に蟠集するを見る。

丘に登れば茶店あり「氷」と云へる旗の濱風に 翻るも涼しく覺ゆ。

脚下は乱礁犬牙錯雜して浪を弄し点々碁布せる間に白沙あり汀渚あり水は玉露の如く澄
び。若し夫れ頭を擧ぐれば前に富峰の英姿颯然として聳ね渺たる相模灘を隔てざる如く
翠峰は箱根足柄天城山脉に流れて左方豆州石廊崎に没す。其より海上三里と云へど寸を
隔て、大島に對し近く城ヶ島の灘ヶ崎に隱る。右方は僅に江の島を認め大磯小田原のほ
ごりは淡夢の中に彷彿残る一帶は諸磯の岬に限らる。方六里の相模灘はこの中に水を湛

へ朝嵐夕靄の變幻極なく時に海若躍り蜃氣樓湧き氣船の蛇影を走らす者白帆の海風を孕む者漁船の網を投し竿を垂る者遠近數十里に亘りて悉く雙眸の中に收むるを得此地最も夕陽の景に富み紫紺の芙蓉猩々色の空、美觀警ふるものなし明月清夜に酒を呼んで嘯き汐風に袂を潤ほすも一興なり。

6 法滿寺蹟 法滿町と稱する地是なり。光念寺の下に在り。今は人家櫛比して其趾を停めず中古法滿寺殿の屋敷趾にして其れより法滿寺開基す現存せる崖の洞窟は嘗て囚人を入れし所なりと云ふ。

法滿町と唱へる地是れなり淨土真宗にて後下總國銚子港に移ると云ふ此餘北條五代記に東樂寺、南藏寺、隨恩寺、此地に在りし由見ゆれども今其廢趾を傳へず。

7 小濱伊勢守景隆屋敷跡 本瑞寺の北にあり今御林となれり瀧四段二畝余景隆始民部左衛門と云ふ武田家に仕へ天正十年甲斐國没落の後召れて東照宮に仕へ奉り屢戰功を顯はし相模上總兩國の内にて三千石を知行し同十八年九月向井正綱間宮高則千賀某等と此

地を警衛せり。

慶長二年九月七日五十八歳にて死す法名を淨見と云ふ。

8 千賀孫兵衛某屋舖跡 能救寺地是なり又小濱屋舖跡の南に某が中屋舖と稱する所あり。

御入國の後時隆等と同く此地に住して水軍を指揮せり(后尾州家に附屬せらる)

9 番所跡 東の町海岸に在り今りの廢跡をのこさず(長二十五間幅七間餘)三崎奉行を置れし時の番所跡ありと云ふ、

按ずるに小笠原系譜に安藝守信盛慶長十九年元和元年大坂御陣の時三浦郡三崎走水に番を勤むと見ゆ然れば大坂の役には當所も信盛守禦せしならん忠勝は攝州に在て水軍の事を奉りし事家譜に見ゆ。

其遷替は阿部四郎兵衛吉成(寛永九年七月七日御使番より)松崎權左衛門吉次(萬治元年六月三日)山本六右衛門(寛文三年十二月十八)山角東兵衛勝平(寛文十一年十一月廿二)土屋權十郎(延寶三年九月廿

り遷)川田六郎左衛門親純(延寶四年正月廿二日)山岡傳五郎影忠(天和元年八月三日大)根來五左衛門(御小性組より轉す)

門(元祿七年七月朔日)等相承て此職(此のしよく)にあり。すべて(與力一員同心)二員勤當す。享保中新に建つ構内に御船藏(御船藏番より遷る)御船藏等あり(又扇の井、櫻の井あり)。

元祿九年二月此職を廢せられし時番所も毀たれしかり此地より西法滿町の山腹に牢穴の跡あり當時罪人禁獄の地なりと云ふ。

10 花暮町

漁船發着所の附近

其昔城ヶ島の櫻花を此處より眺め飽く事を知らず日を暮せしより稱するならん。忌ヶ崎は此岬を指す。

往古は神秘の所にして十一月十一日例祭ある時氏子中に其年の服藏ある者は此處に避居し神事終りて家へ歸るを例させり土人之を出居と稱す。

11 八景原

渡船にて三崎より向ヶ崎に渡り東へ七(八町にして馬駈場と云へる所に出る。)

斷崖東京灣口に臨んで數丈、房總半島城ヶ島半面を瞰下して大平洋上に面す。奇巖怪石腹背相接し洪濤激し千顆萬顆の白泡粉を撒けるが如し山腹山頂は丈低く幹赤き松密生し

岩を隔て、は波の音、松を隔て、は千鳥の聲其眺望佳絶なる事限なし。波を三十間程隔て、京塚と云へる磯あり。

12 光念寺の見晴し

光念寺は三崎町の中央にも云ふ可き入舟町の山にあり。

山の麓に連りて三崎町を臨み港を隔て、城ヶ島に對し一水を狭んで向ヶ崎を見る此處より三崎町の殆ど全部を望み得べし其一段低き空地は元遊廓のありし所にして數年以前災火の禍せし所なり。

13 諸磯村(毛呂伊曾牟良)

北條五代記及正保の頃には諸石と記す。

村は百戸、半農半漁多し濱は宛然盆景の如く遠く淺く沙軟く波弱ければ音も靜にして眠れるが如し。左の鬮蒼たる山は物見塚と稱し三浦導寸の物見せし所あり其海に面せし裾は奇巖兀突して千態を極む蓋諸磯の名ある由緒ならん。右方長嘴の如く突き出でたる上に洋館の翠松の間に仄見ゆるは大學!! 海産物實驗所あり其ほとりより油壺の入口とな

る。

14 臨海實驗所

(幕府時代御用船置場の地にして、維新後も官地なりし云ふ。)

三崎町入船海岸に設立されたるものにして帝國大學臨海實驗所は生物學科研究の爲めに必要なを以て客年相模國三浦郡三崎町に同所建設の地を定め全年六月其の新築に着手したるに六月十三日を以て落成を告ぐ自今理科大學生物科學生をして卒業前凡そ一學期間は本所に就き専ら實驗に従事せしめ且大學院學生及び教員等も同所に於て實地研究を爲すことあるべし三崎の地たるや從來博物學者の好採集地と稱し「ハイヤロネマ」(拂子貝)「ペンタクライナス」(鳥の足貝)其の他稀有なる海産動物の棲息する有名の區域なり故に此臨海實驗所に於て實驗に従事せば我が國沿海の海産動物に就き智識を増加するの實績を觀ん事明なり。此實驗所明治三十年十二月三崎町小網代三浦導寸の古城跡に移轉す。

15 油壺

船を其中央に放ちて端座すれば四面岨々たる山に圍まれ陰森胸に迫り冷

氣襲ひ來り凄寥の想ひに滿つべし。水は油の如く滑にして重く山と水との際には碧苔人を狙ふが如く窺き露滴の音泣くが如く聞ゆ。永正の昔三浦荒次郎恨を懷いて此處に投じてより靈魄永く彷徨ひ夜々哭泣の聲聞ゆと云へり。

16 千駄矢倉

本丸の巽隅崖下にある洞あり油壺入江に面す洞中廣六七坪(高一丈二尺深三)導寸兵糧を貯置せし所と云ふ。

北條五代記に導寸三年籠城す爾るに千駄矢倉と號す大なる岩穴あり是に常に米穀を千駄積置此穴の内も皆はらつて兵糧米盡果ぬれば城中のもの難義に及ぶ云々按するに洞を矢倉と號するは鎌倉三浦邊の俚諺なり。

17 辨天窟

千駄矢倉の南峭壁、巖石を削て階段を造り昇ること十間許洞の深十間

18 三浦陸奥守義同入道導寸之墓

二丸の北隅に在る碑は天明二年建、碑面

從四位下陸奥守導寸義同公墓永正十五年寅年秋七月十一日討死諡號永昌寺殿導寸義同公

大禪定門神儀及辞世の歌を鐫る。

うつものもうたるゝものもかはらげよ

くだけて後ばもこの土くれ。

碑陰に天明二壬寅秋七月永昌九世正機募化縁一造立、施主正木志摩守三浦長門守杉浦出雲守松平縫殿助松平縫殿家臣松本文左衛門奈良長藏と鐫る。

19 三浦彈正少弼義意 導寸墓の東に在り碑面大龍院殿玄心安公大禪定門墓

碑陰に當寺開基三浦前陸奥守導寸公嫡子彈正少弼荒次郎義意公廟所地頭松平縫殿助地所寄附天明二壬寅稔七月十一日網代山海藏禪寺智玉叟代造立と鐫る。

20 義士塚 外郭引橋の邊にあり北條早雲の家士四人の墓あり相傳ふ荒次郎義意

最後の奮戦に敵兵辟易して敢て近くものなし特に彼四人義意を目がけ討て懸る義意た、一刀に打果さんどす導寸其勇敢を憐て放免せしむ。

落城の後導寸の芳志を感じ爰に來て自盡す故に此名ありと云ふ。

城ケ島村

(志庵字加 志末牟良)

城ケ島は又尉ケ島とも云へり(蓋し尉は判官の意味をなし又老翁の稱とも云ふ。)

古書を見るに別に判官等の住みたる事を載せず恐らくは尉は往古老翁の居住せるを取りて稱せしなら。

今の城ケ島は源頼家が公城と書直し給ひけるより斯く記するなり。三崎町より南に海を五六町隔て東西二十余町南北五町余、形は日本々州に似たる島あり。

戸數凡そ百戸人口五百人、多く漁業を營み此の附近の海に於て潜水に従ふものは多く此島の民である。寺は城ケ島山と號す淨土眞宗常光寺のみで城ケ島小學校には七十餘人の生徒を教導しつゝありて加も成績優秀なるを以て縣下の摸範學校と稱せらるゝに至りしと。

三崎港の防波堤をなし全沿岬角暗礁頗る多く港に面したる部を除けば白泡白波洶涌して絶ゆる時あり。和風晴日に輕軻を驅つて嶋を巡れば淵に臨める長蛇の如き老松あり牛馬

の如き岩あり龍虎の如き磯あり洞あり窟あり片々重々争ふて奇状をあす。俯せば昌々たる海水中に魚鱗の閃めくを窺ひ仰けは千鳥等の幽鳴を耳にする。夏時は潜水夫蟹乙女の魚貝海藻を獲るを見る。

又島よりの展望絶佳にして前は十八里の海を横へて大島を望み右は富士足柄の山々起伏して天城山脉に及び伊豆下田の岬に没する左は房總半島が藍色一抹の中に潜めり。

奇 勝 古 蹟

(渡船發着所を中心として右より)

1 淵の御所

海南宮の衆司を勸請す當所に大蛇住み毎年六月祭禮の前夜は三崎へ

2 白植古木

賴朝公遊覽の折りから揚子をさし此島の榮へし事を壽き給ふ中興天火に亡び控となるやどり木あり此木を手折るものは病疾患ありと云ふ。

3 觀音産

舖陀樂寺の傳

4 水垂

賴朝遊覽の時此地の清泉を以て煎茶及硯の水に用られしと云ひ

5 藥師堂

神宮寺の舊地なり。(本名鳴山古に藥師堂あり天正十八年)

6 眞名板石

組者の傳あり。(二つ山に在り亦資盈が郎等の靈を祀りしと云ふ碑あり)

7 揖三郎殿山

明神の家司。(高三尺洲の御崎及此地共に社地の稱のみにて社なし)

8 猪島

猪の子脊に似たるを以て是れを名付く。

9 釜洗井戸

遊覽の釜を埋む。

10 居洗井戸

其時の用水なり。

11 牛ヶ池

早魃にも水絶へず今も水牛住みける由。

12 長津呂入江

燈臺の南に當る北條早雲の家臣長津呂七郎右衛門なるもの此處

に陣營を置きしと云ふ。

13 赤羽根 (又は赤羽子)彼の支那に於ける赤壁の如き所なり。

14 白雉竹鶴 近年公命に依つてはなす野狐のために絶ゆ。

10 遠見番所 安房崎にあり文化八年領主松平肥後守容衆建つ其頃は臺場と唱

へ大筒の備あり文政四年浦賀奉行の持となり同心三人を置いて非常を警む。

16 二ツ山 山二つ連るを以て是れを云ふ。

17 午の脊 馬の脊の如くして天の岩橋とも云ふべき所なり。

18 酔女濱 燈臺の下にして三崎に面し居る濱を云ふ。

19 權作 里見義弘の家士安西權作と云ふもの居住の地なりと云ふ爰に觀

音臺と唱ふる所あり昔觀音堂ありて治正寺と號せり後廢して像は毘沙門村海應寺に移すと云へり。

20 僧ヶ谷 古里見家の士薙髮して隱栖せし所と云ふ。

21 養老子 往古養老寺のありし後なりと云ふ。

22 常光寺 城ヶ島山と號す淨土眞宗三崎町最福寺末本尊阿彌陀を安ず古は

阿彌陀堂地なり天正元年僧了善一寺となし寺號を授け最福寺の末となす。

23 安房崎 房州へ向ひし所あり此に神樂高根と云ふ所あり土人鎌倉將軍、

洲崎明神へ奉納の神樂を奏せられし所なりと云ふ。

24 實右衛門松 三浦導寸の臣下にして小網代新井城落去の際導寸の幼兒をいだ

いて遁れかくれ居りしが其幼兒病沒せしを此處に葬り其塚の上に植わたる松繁茂して今

大木となり居るなり

25 岩や嶋の名稱 笠島、釜島、千鳥島、平島、赤羽島(赤羽と同じ)江の子島、

居島、缺ヶ島、里島、小黑島。

26 濱の名稱

醉女濱、小濱、アキリ濱、村下濱。

27 崎の名稱

遊ヶ崎、灘ヶ崎、安房崎。

28 水難救濟會

監視所。俗に馬の脊と稱する頂上に在りて眺望絶佳の地あり。

明治三十八年四月、大日本水難救濟會より建設せらる。

29 遊ヶ崎

手斧山、通り矢、尾ヶ崎を斜に見て一丁餘の白沙が紺碧の山を背にして横はる波穩にして清く好箇の水泳場なり往古鎌倉將軍の遊宴せし所の一にして遊

ヶ崎とは此故を以て稱するならん。

50 海南明神社

元龜中三崎海南社を勸請す六月十八日祭る村民持下同じ。

31 洲の御崎社地

安房崎に在り海を隔て房州、洲の崎明神の社地と相對す故に

神號とす藤原資盈が郎等の靈を祀りしと云ふ。古は根柢の神木ありしが貞享三年四月天災に罹り枯槁す村民其枯木を伐て海南社に納め置く。圍一丈餘相傳ふ此木は源頼朝遊覽

のとき揚枝を挿置れしに枝葉を生じ遂に老木となりしと云ふ。

32 燈臺

(島の西南端に在り)

城ヶ島の燈臺は或時は狼煙臺となり篝火臺となり又燈明臺となり幾代幾世を経て遂に今日の燈臺を見るに至つた。されば其目的も變遷して古くは海賊防禦の用に供し或は外寇の防備のために砲臺と共に併置され、又船首を支配し中古は望樓に使用せりと聞けり然して其始めて燈火の設置されしは北條氏政の時代にして今の安房崎に在る遠見番所の附近なるべし。北條五代記の里見義高との戦記にあり。

(上畧) 氏政の兵船は三浦三崎に悉く船をかけ置く義高の海賊(此時代は相互に敵の船を海賊船と云へり)或時は

一隻二隻にて夜中に渡海し(房州より)海邊の所在を騷し或時は數隻をもよほし俄に來て浦里を焼く、此由三崎へ告來れども船を出す暇にはわたり近ければ(富津岬と相州走水の間を云ふ)やがて歸海すこれによりて山の峯々に薪を積み置き貝鐘をつるし人守りゐて敵の船來るを見付火を立て、貝鐘を鳴らせば山峰に火を立ちつゞけ即時に

三崎へ聞へ船を乗り出す是を夜は篝火と名け晝は狼煙と云ふ。(下略)
 次で慶安元年三崎奉行安部次郎兵衛安房崎に烽火臺を設け延寶六年に廢せられて同年家網の時徳川氏武田信玄の舊臣間宮馬之助をして燈明臺を設けせしめた。(場所は定かならず今の燈臺の地とも云ひ安房崎ならんとも云ふ) 木造の燈臺にして西の内紙を四面に貼附し油を塗り燈光を導くつもりであつたのだが光力が微弱の爲航海に不便であつた。依て紀伊大坂等の船主等が篝火に改制せられん事を浦賀奉行廳に請ふたので凡五十年を経て享保六年に浦賀奉行の堀隱岐守義利其議を容れ實地調査の上松炬を以て燈明に代わる様になつた即ち同年七月十二日工を起し九月四日竣工して同十八日初焚を行ふた篝火の經費は其頃西京の船の出入頻繁なりし浦賀港に碇泊する商船より徴收して稱するに石錢と云ふた。

一夜に費す所松材(短夜八十束)を定額とし一束は五本にして(長さ一尺五寸)とせし。爾後外國の戰艦屢々來船するを以て徳川氏は東京灣の警護の爲望樓を併置し手代をして

其事務を兼ね督せしむ。
 年遷り諸港開放となり明治三年八月十三日佛人ウエルニ一氏の手にて現今の燈臺産れ出でたるなり。
 北緯三十五度七分四十秒東緯百三十九度六分五十四秒白色煉瓦石造にして不動綠色光達距離凡九里に及ぶ。

三崎 曆

1 海産物 鯉。(古書に鎌倉の海より云々云はれ) 鮑。海老。螺貝。海鼠。烏賊。

根津子草(古書に三浦の崎なる) 根津子草と云たり)

2 植 物 鼠大根。(鎌倉の産にも有れども) 水仙。(城ヶ島にあり形二重の) 百合。

3 俗謡俚歌集

◎三崎古歌

○咲く花に向ケ崎のあしたより

遊ケ崎の月にあるまで

○三崎わのありいろによする磯い波

居ても立ちても我がもゆる君

○よもすがらたきもたゆまぬかどりびは

沖こぐ舟の便りなるらん

◎三崎名所俳句

○三ゆまぬや櫻の御所の遠かすみ

○浦風のかほりたやさす八ヶ原

○みおろすや寶藏山の小春海

○さつとさし實右衛門松のしぐれかき
○きさんじを遊ケ崎の汐干かな

◎お船唄

お船唄には、神謡、小唄、かすり、具足ぞろへ、田唄等あり今其一部を記す。

(小唄の例)

○七つ小姫か菜をも摘みよ。若菜をも摘みそや。旅の殿さまこれを見て、もちとわか
くば大きいければ妻にしよもの妻にせうもの、ろこでむすめの返歌にはちさいくど
なせ仰しやる。ちさき小舟も灘を乗る。關の小がた身は細しとも、綾も裁ちそよ錦
も裁ちそよ。

◎座 謡(高砂、四海波)

座謡にはわんこのぶし(神樂丸。丑待。教盛。炬達。西行法師等)さかたぶし(京の大臣。烏帽子屋。なごめや。鬨等)十七ぶし。はう
た。語り。しもだぶし。さつまぶし。まごぶし。さやりぶし。二上りぶし等のものあ

り今其一二を記す。

◎神樂丸(わんこのぶし)の例

○さても目出度の神樂丸。艦の飾は大黒よおもてのさがりにお蛭子よ。中には十一のお船玉。かねにきんしやのせりを積む。さてもめでたの神樂丸。

(十七ぶし)の例

○十七が柳の下で芹を摘む。身は反る、柳はよれてからまる。

◎烏帽子屋(さかたぶし)の例

○花に勝りし烏帽子屋の娘、五郎太夫の娘にて篠の姫とは、わが事なり。商賣あれば、ゑぼし折。折烏帽子に立て烏帽子。しなかけ烏帽子もござります。折りてめでたの左緒の、かけ緒の紐がもろ結び。惚れた。惚れたよ相惚れに。爰に又源氏の大将左馬の頭、義朝公の三男に鞍馬の山におはします、想ふ殿御の牛若に、着せて面影見てござる。

(はうた)の例

○あら玉の年の初めに筆を執りやよろづの寶がきぎ集むる。

◎語 り(義 經)

○頃は三月十八日の事なりしに、平家は海の面一町ばかりに船を泛べ、源氏も其の汀に打出でたまひ大將軍のおん出立は、赤地の錦の直垂に紫裾濃わん着背長 鍔ふんばり鞍かさに突立ち上り。一人のわん使檢非違使五位の尉源の義經と名乗りたまひしおん骨柄。あゝ天晴大將やとみしまの世にこそ出でられ候ふ。

◎三崎チャツキラニ(初聲舞)とも云ふ

○めでたくの若松様よ枝も榮ゆる葉もしげる。

○揃ったくよ踊り子衆様よ稻の出穂よりまだ揃った。

○山で赤いのは蜜柑か柚子かたしやお稻荷さんのお鳥井か。

○沖に見ゆるは丁半丸よ一に五六の帆が見ゆる。

○躑躅、椿は山へころ咲けご今じや親船の艦に咲く。

○木綿畑の真中頃で雪駄買つて呉りよと欺してわいて今じや雪駄の音もかい。

○このわかみさんは何時来て見ても黄金禱で鐵漿ばかり。

○俺が兄さんは薪船の船頭薪が賣れぬか但しやお江戸の船止めか。

○江戸へ〜と皆さん御座る江戸は清くも住みよくもないが御江戸は女子の化粧ごころ

○三浦三崎の此お踊り千秋万歳お目出度や。

◎盆歌(八月)(三崎子供對向三崎子供)何れも女子供とす

○盆〜の十六日にお閻魔様へ參へろうとしたら珠數の緒が切れて鼻緒が切れて南

無釋迦寺へ手でお拜む〜。

○向ヶ崎の餓鬼等はあせ未だ出ない肝腎要めの帯がない、帯がなければ三崎へ御出で三

崎じやたんと縷子のお帯〜。縷子のお帯を腰まき巻いて彼方ら向け千鳥此方向

け千鳥あれは眞んの綾千鳥〜。

○三崎の子供衆は新縮緬の襷き向ヶ崎の餓鬼等は天鷲絨の襷きよく〜見れば茄子の皮

〜。

○戻れ〜桃の葉でもぞれ戻つた者には髪を結つて遣るぞ島田が好いか唐子が好いか、

島田も嫌よ唐子も嫌よお江戸ではやるお下け髪み〜。

○向ヶ崎は恐い何故亦恐い榮螺の殻が化けて出る〜。

○向ヶ崎の子供は意地の悪るい子供ちよぶのまわりで瓜の皮拾つて皆さん来い〜飯戯

とやるがま〜と茶漬けに皆食べる〜。

○盆〜やるには男を出すな男を出すと恥になる〜。

釣瓶のタガへ蜻蛉が止つてやれ飛べ蜻蛉それ飛べ蜻蛉飛ぬと竿でつゝ突き飛ばす〜

○向ヶ崎の者に呉れ度い物は蛇の生焼け蜥蜴の差し身まだ〜呉れたい物は唐椒唐椒の

中には色々御座る青いのもあれば赤いのもある〜。

○向ふのく御稻荷様は朝日にて照られてお色が黒いお色が黒けりや陳唐笠被れ、陳唐笠嫌よくお江戸で流行るお下げ髪みくく。

◎三崎甚句

- エー三浦三崎はアイヨ、女の世はりアッダヨ、男極樂寝て待ちる。
- 三崎港へドンと打つ波は可愛御方のドキヨ定め。
- 三崎港に御出での節は御寄り下され我宅へ。
- 私しや三崎の濱邊の生ち色の黒いのは親ゆづり。
- 三崎城ヶ島の鳥賊取り舟は鳥賊も取らずにかゝを取る。
- 三浦三崎に本籍入れて夫婦きざりて暮したい。
- 三崎城ヶ島は見事な島よ根から生いたか浮き島か。
- 三崎北條に尾のちい狐私も四五度だまされた。

○私しや三崎の荒濱生ち米のなる木はまだ知らぬ。

4年中行事

- 一月二日 船祝ひ。四日(門松を納め當日より十三日迄で町々の子供松の一枝を手毎に持て海南宮に日参す社靈を祝して歸る此)十四日(未明に左義長あり町毎に海岸に)十五日(町中火防)同日本宮社祭同日(女子供左義長を勤む)十六日(百萬遍町中を修行)供初聲願ひや)十六日(光念寺より勤む)
- 六月十八日海南宮祭禮(御座船を飾り海上に神輿を移す。磯)
- 十月(十夜まで弘光念寺に有り)霜月初申(海南宮の神事は申の神樂といふ此日は)翌日市立(是をオセウツノマチ)同日鍋町に鍋市立(年中行事終)

5七

- 向ヶ崎 (北條の入江を云ふ)
- 蟹ヶ崎 (同崎を云ふ)
- 手斧ヶ崎 (同海岸を云ふ)
- 昔伊勢の國の蟹住けるよし。
- (其形手斧に似たればな)
- (り一名長南崎ともいふ)

安房の國へ向ふに依つて其名あり。
 遊覽の折から此所にて宴興あり。
 相模灘十八里に出向ふなり。
 (往古此所の神祕にて十一月十一日例祭あり氏子其年の忌服あるもの神事のうち家をばなれ此所へ来る神事終つて歸る里俗是を出居といふ)

21 新井古城 (舊蹟の次へ續く)

當城は三浦氏累世割據の處なり永享の頃三浦介時高當城にて討死す。

小田原記曰く明應三年三浦介時高入道と子息新介義同と不和の合戦あり父時高忽に討れけり云ふ。

義同三浦介となり後に陸奥守入道導寸と號す其子荒次郎義意を當城に籠め吾身は岡崎城に(大住郡)居住して上杉氏の命に隨ふ永正九年八月北條新九郎入道早雲の爲に岡崎を責め落され當城に落來て父子共に楯籠る其後早雲當城に押寄せ向城を取て三年まで兵糧攻にせしかば城中兵糧盡き同十五年七月十一日義同父子郎黨己下百餘輩打て出て悉く討死す。此後北條氏の持城とあり天正十八年小田原落去の時永く廢城となりしものなり。

交通上の設備

交通機關としては陸上交通機關、水上交通機關あり其中陸上交通機關には乗合馬車あり又水上交通機關としては汽船あり。

▲ 乗合馬車

馬車は三崎より浦賀に至る交通機關の不備を補ふものにして浦賀間を往復するものあり

▲ 汽船

汽船は毎夜二回當地を出發するものあり。夏季に至り一隻の汽船を増發して避暑客其他の便に供すあり。

▲ 渡船

向ヶ崎の渡し 金五厘 日の出町海岸より向ヶ崎へ渡す。

城ヶ島の渡し 金壹錢 仲崎町海岸より城ヶ島に渡す。

三崎町に於ける各種の建物

帝國大學臨海實驗所
三崎郵便電信局
横須賀警察署三崎分署
大日本帝國水難救濟會三崎救難所
三崎税關監視所
横須賀區裁判所三崎出張所
三浦共立汽船株式會社
東京灣汽船株式會社三崎扱所
關東銀行三崎支店
三崎町役場
三崎小學校(尋常高等)

小網代村
仲崎町
入船町
入船町
東岡町
海南町
花暮町
入船町
東岡町
東岡町

三浦電氣株式會社
小網代小學校
燈臺
三崎製氷株式會社

三崎町に於ける神社佛閣左の如し

(社名)
海南神社
白髭神社
神明社
海南明神社
諏訪神社
神明社
神明社

(社格)
(郷社)
(村社)
(村社)
(村社)
(村社)
(村社)
(村社)

六合諏訪之上
小網代村
城ヶ島
向ヶ崎
三崎町海南町
三崎町小網代
三崎町二町谷
三崎町城ヶ島
三崎町向ヶ崎
三崎町宮川
三崎町諸磯

三浦郡里程表 (三崎町より)

南浦村	一里二十五町二十三間
北浦村	二里七町五十二間
久里濱村	三里十町二間
浦賀町	四里三町三十三間
浦郷村	六里三十五町五十四間
初聲村	一里二十一町十三間
長井村	二里二十八町十間
武山村	二里十三町十一間
西浦村	三里八町四十二間
葉山村	五里三町三十二間
田越村	六里三町二十七間
衣笠村	四里七町四十六間

横須賀	四里二十四町四十間
横濱	十三里十町三十九間
東京	二十一里一町三十九間

旅館

岬陽館 (宮城町)	三崎館 (西野町)
青柳亭 (日の出町)	初聲館 (西野町)
温泉亭 (日の出町)	吾妻家 (諏訪町)
紀伊屋 (入船町)	

毎年六月中旬頃より九月頃までは東京其他より絶へず千人位の避暑客が入り込み又避暑客も多く見ゆるなり、現在旅館は七軒なれども右避暑客、避暑客を收容し切れずとて四十二年八月三崎町繁榮組合あるものを組織し同避暑客其他に便益を計り居るあり。

室等下 室等中
松岩下浦東 松岩下浦東

但し小兒三歲以下無賃十二歲以下半額とす	輪	浦	浦	賀	京	輪	浦	浦	賀	京	輪	浦	浦	賀	京

	五	七	八	十五	二十五	七	十一	十二	十五	二十五	八	十一	十二	十五	二十五
	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

三崎 間 瀛船 賃金表

東浦下岩松三 三松岩下浦東

京賀浦浦輪崎 崎輪浦浦賀京
着發發發發發 着發發發發發

三崎 間 瀛船 發着時間表

(直航船)	午前 三 時	(直航船)	午後 十時 三十分	(直航船)	午前 七 時	(寄港船)	午前 七時 十五分	(寄港船)	午前 十時 十五分	(寄港船)	午前 十一時 十五分	(寄港船)	午後 一時 十五分	(寄港船)	午後 一時 三十分	(寄港船)	午後 九時 三十分	(寄港船)	午後 十一時 三十分	(寄港船)	午後 四時 三十分
-------	--------	-------	-----------	-------	--------	-------	-----------	-------	-----------	-------	------------	-------	-----------	-------	-----------	-------	-----------	-------	------------	-------	-----------

東浦金 松金下浦東

田發發
賀發發
京着

直航船 午前 三時

午後 十時三十分
午後 十一時三十分
午前 四時三十分

(東京灣汽船株式會社三崎扱所)

三崎間汽船賃金表

東京	浦賀	下浦	金田	松輪	三崎
二十一錢	七錢	四錢	四錢	六錢	四錢
(浦賀)	(下浦)	(金田)	(松輪)	(三崎)	
十七錢	十四錢	二十一錢	二十一錢	二十一錢	

(同船には別に中等室下等室の區別なし)

東京灣汽船株式會社三崎扱所

東浦金 三松金下浦東

京發發
浦發發
田發發
輪發發
崎發發
松發發
三發發

(發着地名)

(直航船) 午前 七時

(寄港船)

午後 七時三十分
午前 十一時三十分
午後 十二時三十分
午後 一時三十分
午後 二時三十分
午後 九時
午後 九時三十分

三崎間汽船時間表

御乗船の御方は乗船券御買求めのとき往所、職業、年齢等を必ず御申出さるべし。
◎乗船客の御心得
(三浦共立運輸株式會社)

室通普 室別特
下浦東 下浦東

航 書
瀛 船 賃 金 表

浦	賀	京	浦	賀	京
.....
六	十四	二十一	四十	四十	四十
錢	錢	錢	錢	錢	錢

(東京灣瀛船株式會社三崎扱所)

三 崎 繁 榮 組 合 規 定

一、本組合は貸間料及賄料を低廉になし取扱を懇切になすを以て目的とす

三下浦東 東浦下三

崎浦賀京 京賀浦崎

着	發	發	發	着	發	發	發
午後	寄港	午後	午後	午後	午前	午前	午前
八	か	六	三	一	十一	十	八
時	し	時	時	時	時	時	時
				三	三		
				十分	十分		

(注意)

書航瀛船は夏季に至り特別に出航せしむるなり。瀛船には特別室及び電氣等の設備あり。

夏 季 航 書 瀛 船 發 着 時 間 表

一、貸間料

一、金壹圓以下 上等室疊 壹枚に付一ヶ月

一、金七拾錢以下 中等室疊 壹枚に付一ヶ月

一、金五拾錢以下 並等室疊 壹枚に付一ヶ月

但し滞在日數十五日以上は一ヶ月分十五日未滿は半ヶ月分を申受くる事

一、賄料

一、金四拾五錢以下(一日分)

但し特に客人より注文品ありし時は相當代價を申受くる事

一、貸間料及び賄料は一週間分前金に申受くるも滞在一週間に滿ざる時は精算の上返戻なすこと

一、知人の紹介なき御人は謝絶することあるべし

一、結核性及び流行病患者と認むるときは謝絶すべし

一、客人ありし時は即日三崎警察分署に届け出づべし又退去の時も又同じ

一、組合員は客人退去の時直ちに最寄の幹事又は副幹事へ申出消毒の規定を遵守すべし

一、組合員は常に衛生を重じ家屋の内外を清潔にすべし

一、組合員にして客人に對し不都合の行爲ありしとき客人は組合事務所又は幹事へ申告せられたし

右協議之上確定候也

四十三三年七月

繁 榮 組 合

旅 館 案 内 (規定)

宿 料 一 金 壹 圓

一 金 八 拾 錢

一 金 六 拾 錢

(片旅館料は總て四分の三)

一、宿泊料は御滞在と雖ども毎朝御拂之事

長	長	長	三	三	三	三	三	三	浦	浦	三	
井	井	井	崎	崎	崎	葉山	崎	崎	崎	賀	賀	崎
發	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發
午後	午後	〇時	午後	午前	午前	午後	午前	午前	午後	午後	十二時	午前
六時	四時	三十分	二時	十一時	七時	二時	十一時	八時	四時	三十分	三十分	一時
三	三	三	長	長	長	葉	葉	葉	葉	三	三	浦
崎	崎	崎	井	井	井	山	山	山	山	崎	崎	賀
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行

葉山發は其時に依るものにして時間定めおし
 (長井乘換)
 (長井乘換)
 (直行)
 (長井乘換)

一、御止宿中御用先きに居りて御泊り相成候共宿元にては其準備致し候に付旅籠料の割引等は不申候事
 一、夕飯朝飯とも前以て御斷り無之方は全料申受くる事
 一、乳舎兒にして御膳部家具は仕度致さぬ方も總て大人同様の責任に付御止宿料の半額を申受候事
 一、御大切の御所持品は御預け下され度様願度若し御手元にて紛失致し候も辨償の義務無之候事

右の通組合中協議之上確定候條御承諾の上御投宿被下度候也

四十二年八月

旅館組合取締行事

三 崎 乘合馬車時間表

三 崎 發 午前 六時 三十分

浦 賀 行

三崎 乗合馬車賃金表

三崎より

引橋まで	金 八 錢
富田まで	金 二 五 錢
林 まで	金 三 五 錢
久里濱まで	金 四 十 錢
浦賀まで	金 四 二 錢
秋谷まで	金 五 五 錢
葉山まで	金 六 五 錢
長井まで	金 三 五 錢

但し雨天惡道に付一區一錢増しの事、臨時仕立馬車あり。

(き さ み)

明治四十四年八月廿五日印 刷
 明治四十四年八月廿八日發 行
 大正二年七月十五日再版發行

定價 金二十錢

著作兼 發行者 下 里 昇

印刷者 神 田 清

印刷所 橫須賀印刷株式會社

神奈川縣橫須賀市小川町一番地

神奈川縣橫須賀市小川町一番地



不許複製

貸 間 案 内

屋號及氏名	職業	所在地及番地	屋號及氏名	職業	所在地及番地
水野 キク	大工	日ノ出六二	青木常次郎	質屋	向ヶ崎二四二五
三富 コマ	紺屋	日ノ出二三	藤崎治郎吉	魚商	向ヶ崎二四八五
富澤 爲司	運送	日ノ出一	宮川 權藏	魚商	向ヶ崎二四〇七
三堀 キヨ	理髮	日ノ出一	宮川 秀次郎	魚商	向ヶ崎二四二三
田邊 アサ	無職	日ノ出一	岩崎 鶴松	船夫	向ヶ崎二四八九
鹽崎 吉五郎	無職	日ノ出一	杉江 寅吉	魚商	六合三八二
高木 甚五右衛門	船宿	入船一二三	相澤 留次郎	飲食	六合二五八七
本橋 彦太郎	無職	入船一二二	葉山 國五郎	無職	六合三二四五
高木 辰造	船宿	入船一〇八	松崎 春吉	魚商	二町谷三九〇三
高麗 訥常	寺院	入船一	土田 興榮	寺院	二町谷三八二〇
金子 八次郎	船宿	入船一〇二	小川 紋四郎	魚商	二町谷三八七三
高木 六藏	船宿	入船九九	石渡 マキ	製造	二町谷三八八五
渡邊 利三郎	魚商	仲崎一五	石渡 權七	魚商	二町谷三八八九
大川 賜三	無職	仲崎八	松崎 タマ	販賣	二町谷三八四五
三橋 市太郎	魚商	仲崎一七	石渡 仲藏	魚商	二町谷三八九〇
鈴木 藤右衛門	魚商	花暮九六	小川 平七	魚商	二町谷三九一〇
若林 安寶	藥商	海南三五	石渡 鯛次郎	魚商	二町谷三八一一
中村 勝藏	魚商	海南五六	白渡 文吉	魚商	二町谷三八一五
大谷 傳次郎	乾物商	西野三四	二見 新次郎	魚商	二町谷三八一六
鈴木 民造	大工	西野七六	石渡 三吉	魚商	二町谷三六八五
新倉 倉吉	魚商	西野一九	松崎 長吉	魚商	二町谷三九七〇
西川 日忍	寺院	上橋三七四六	小林 秀藏	魚商	二町谷三八一四
稻垣 文粹	寺院	上橋三六九二	石渡 作松	魚商	二町谷三八八三
齋藤 伊之助	船大工	宮城一九	河野 寅吉	魚商	二町谷三八四六
黒川 平吉	魚商	宮城三八九	三春 寶溪	寺院	二町谷三八七五
鹽瀨 ヲウ	無職	宮城八九	石渡 定七	魚商	二町谷三八八七
木村 已之助	魚商	宮城五三	石井 テウ	無職	二町谷四〇四二
鈴木 仙次	魚商	宮城五一九	石渡 寅吉	魚商	二町谷三九二八
新明 豊松	無職	西濱一一一	二谷 俊道	教員	二町谷三九三四
大井 清吉	魚商	西濱四〇	石渡 直道	無職	二町谷三九七四
出口 由太郎	魚商	西濱一七	山田 マツ	無職	二町谷三九八四
出口 ヅル	販賣	西濱一八	石渡 政吉	魚商	二町谷三八一一
泉田 寅吉	魚商	西濱二	石渡 萬吉	魚商	二町谷三八一五
新明 寅吉	魚商	西濱三	今井 權七	魚商	二町谷三九九七
鈴木 ハル	販賣	西濱一〇	石渡 文次郎	魚商	二町谷三八八九

貸 間 案 内

鹽崎吉五郎	無職	日ノ出	二	高木甚五右衛門	船宿	入船一二三	相澤留次郎	飲食	六合二五八七		
本橋彦太郎	無職	入船一二二	葉山國五郎	無職	六合三二四五	高木辰造	船宿	入船一〇八	松崎春吉	魚商	二町谷三九〇三
高麗訥常	寺院	入船一	土田興榮	寺院	二町谷三八二〇	金子八次郎	船宿	入船一〇二	小川紋四郎	魚商	二町谷三八七三
高木六藏	船宿	入船九九	石渡マキ	製造	二町谷三八八五	渡邊利三郎	魚商	仲崎一五	石渡權七	魚商	二町谷三八八九
大川賜三	無職	仲崎八	松崎タマ	販賣	二町谷三八四五	三橋市太郎	魚商	仲崎一七	石渡仲藏	魚商	二町谷三八九〇
鈴木藤右衛門	魚商	花暮九六	小川平七	魚商	二町谷三九一〇	鈴木安寶	藥商	海南三五	石渡鯛次郎	魚商	二町谷三八一一
中村勝藏	魚商	海南五六	石渡文吉	魚商	二町谷三八一五	大谷傳次郎	乾物商	西野三四	二見新次郎	魚商	二町谷三八一六
鈴木民造	大工	西野七六	石渡三吉	魚商	二町谷三六八五	新倉倉吉	魚商	西野一九	松崎長吉	魚商	二町谷三九七〇
西川日忍	寺院	上橋三七四六	小林秀藏	魚商	二町谷三八一四	稻垣文粹	寺院	上橋三六九二	石渡作松	魚商	二町谷三八八三
齋藤伊之助	船大工	宮城一九	河野寅吉	魚商	二町谷三八四六	黑川平吉	魚商	宮城三八九	三春寶溪	寺院	二町谷三八七五
鹽瀨リウ	無職	宮城八九	石井テウ	無職	二町谷四〇四二	鹽瀨リウ	無職	宮城八九	石渡定七	魚商	二町谷三八八七
木村已之助	魚商	宮城五三	石渡寅吉	魚商	二町谷三九二八	木村已之助	魚商	宮城五三	二谷俊道	教員	二町谷三九三四
鈴木仙次	魚商	宮城五一九	石渡直道	無職	二町谷三九七四	新明豊松	無職	西濱一一一	山田マツ	無職	二町谷三九八四
大井清吉	魚商	西濱四〇	石渡政吉	魚商	二町谷三八一一	大井清吉	魚商	西濱四〇	石渡萬吉	魚商	二町谷三八一五
出口由太郎	魚商	西濱一七	今井權七	魚商	二町谷三九七九	出口ツル	販賣	西濱一八	石渡文次郎	魚商	二町谷三八八九
泉田寅吉	魚商	西濱二	石渡庄次郎	魚商	二町谷三八三一	泉田寅吉	魚商	西濱二	石渡關太郎	魚商	二町谷三八三三
新明寅吉	魚商	西濱三	巢山正欣	教員	小綱代一四二五	新明寅吉	魚商	西濱三	池田喜左衛門	販賣	向ヶ崎二四〇
鈴木ハル	販賣	西濱一〇				鈴木ハル	販賣	西濱一〇	相良彌吉	魚商	向ヶ崎二四七九
杉山要	教員	城ヶ島五〇五				杉山要	教員	城ヶ島五〇五	土田興邦	寺院	向ヶ崎二三九九
脇坂了雄	寺院	城ヶ島四二八				脇坂了雄	寺院	城ヶ島四二八	宮下長五郎	無職	向ヶ崎二四九〇

三崎信託社

業務主任 松井清吉

一、種 目

一、貸間貸家紹介 (紹介料金貳拾錢)

一、地所家屋賣買

一、物品金錢貸借

一、別荘用地御覽の御方には特に

案内無料

一、其他各種の信託を懇切に取扱

可申候

祝 發 刊

町 會 議 員

重	下	松	本	葉	杉	宮	久	杉	下	鈴	下	長	青	清	抱	小	澤
田	里	崎	橋	山	川	野	田	里	木	里	田	田	木	水	井	村	村
佐	梅	金	彦	又	山	長	六	半	之	次	代	三	忠	左	暲	良	康
右	次	四	太	三	五	六	五	六	五	六	三	三	左	暲	良	康	太
衛	門	郎	郎	郎	郎	郎	要	郎	松	六	助	郎	藏	郎	民	造	平
門	郎	郎	郎	郎	郎	郎	要	郎	松	六	助	郎	藏	郎	民	造	平

可申候

案内無料

一、其他各種の信託を懇切に取扱

一、別荘用地御覽の御方には特に

三崎分署長

深野 龜次郎

三崎町小學校長

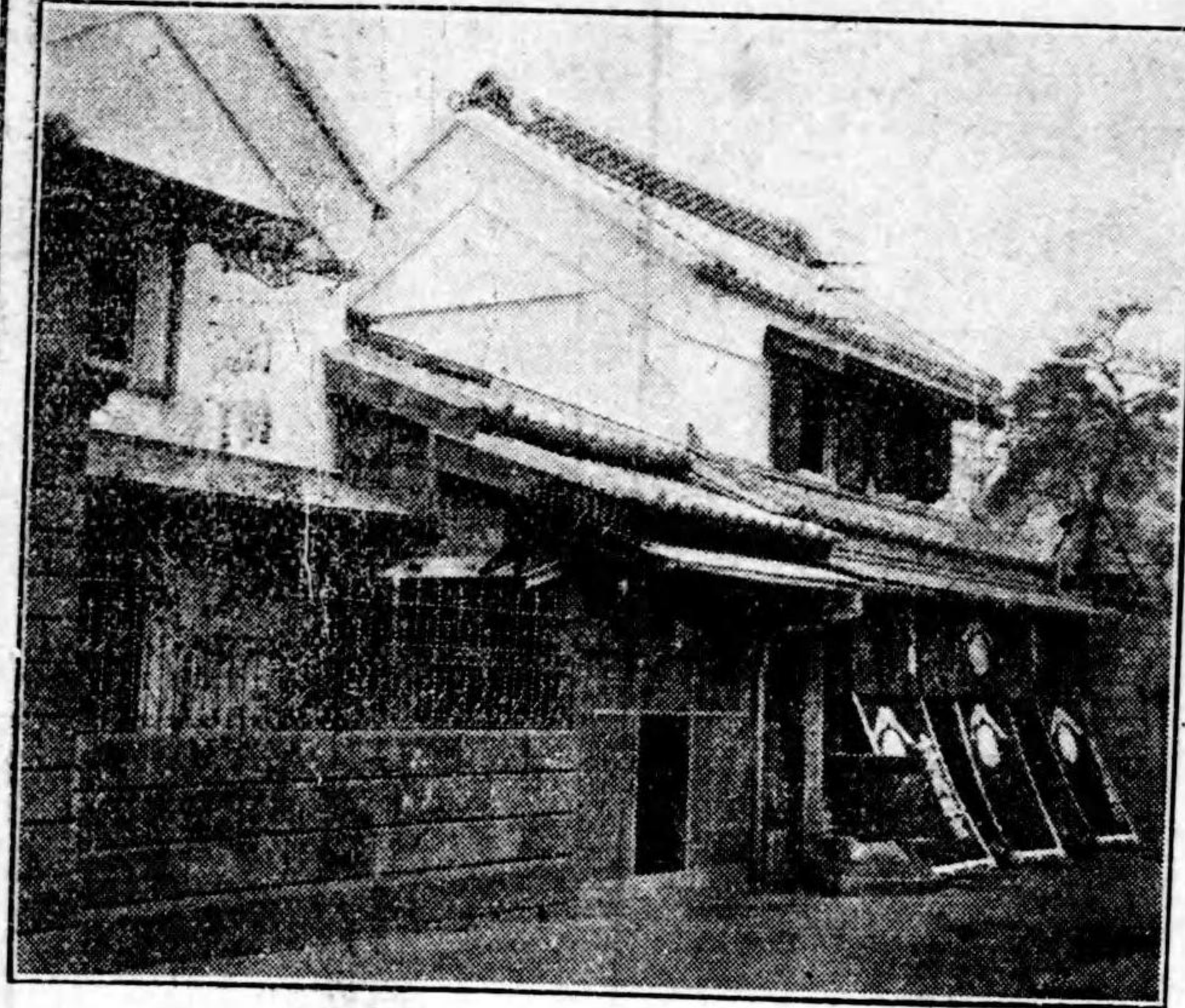
鈴木 喜一郎

三崎町長

佐藤 元次郎

三崎町諸磯

青木 藤吉



季節向の新柄種々取
揃置き候間何卒御買
求めの程奉希上候

南部屋號

吳服 太物 商 小村 吳服店

電話 二番

三崎町汽船會社長

宮川長五郎

三崎町郵便電信局長

長田豊三郎

三崎町海南

清水峰民

三崎町入舟

新井民一郎

三崎町日ノ出

森本道三

三崎町消防組頭

長谷川嘉兵衛

三崎町六合東岡

神田虎治

三崎町六合東岡

本橋彦太郎

三崎町六合東岡

抱井
リウ

三崎町向ヶ崎

管澤
信太郎

三崎町城ヶ島

杉山
要

三崎町諏訪

土方
圓周



弊館は海岸に面し建築しありて座敷より遠く海上の遠景を眺望し殊に居ながらにして釣魚の楽しみを爲し得られ申し候
 料理は四季共に新鮮なるは弊館の誇りとする處に御座候
 避暑若しくは海水浴等に御滞在には至極御便利に御賄ひ申上候

米穀、酒類、砂糖、薪炭、石油、
 雜貨類、三崎名勝繪はがき類

相州三崎町宮城(電話十一番)

旅館 御料 館 岬 陽 館

館主 中野甲子太郎

露光量違いの為重複撮影

三崎町名所案内を刊す

一 御銘茶 一 煙草
 一 饅頭類 一 輪はがき
 一名所案内
 相州三崎町日ノ出
高橋屋商店
 仕出し御料理
 御手輕に調進可仕候
 相州三崎町諏訪
梅花亭

米雜穀乾物
 小麥粉砂糖
 相州三崎町花暮
木村勘藏商店
 電話 七番

三崎町名所案内を刊す

三崎町諏訪 (電話十四番)
尾瀬戸信太郎
 三崎町諏訪
小村 康平

東京灣汽船三崎取扱所
 主任 **鈴木 平司**
 三崎町海南神社神官
吉野 小源次

露光量違いの為重複撮影

(三崎名所案内を刊す)	
<p>一 御銘茶</p> <p>一 煙草</p> <p>一 鯉節類</p> <p>一 繪はがき</p> <p>一名所案内</p> <p>相州三崎町日ノ出</p> <p>高橋屋商店</p>	<p>仕出し御料理</p> <p>御手輕に調進可仕候</p> <p>相州三崎町諏訪</p> <p>梅花亭</p>
<p>米雜穀乾物</p> <p>小麥粉砂糖</p> <p>相州三崎町花暮</p> <p>木村勘藏商店</p> <p>電話 七番</p>	

(三崎名所案内を刊す)	
<p>三崎町諏訪 (電話十四番)</p> <p>尾瀬戸信太郎</p>	<p>三崎町諏訪</p> <p>小村 康平</p>
<p>東京灣汽船三崎取扱所</p> <p>主任 鈴木 平司</p>	<p>三崎町海南神社神官</p> <p>吉野 小源次</p>

米穀、酒類、石油、
砂糖、其他雜貨類、
販賣致し親切便利を
旨とし安價に賣捌き
致す可く候

三崎町入舟

澤村政太郎

(電話三番)



米穀酒類 石川春吉 三崎町日の出	金物商 山田益吉 三崎町日の出	理髮業 辰床 三堀辰五郎 三崎町日の出	下駄商 三壁萬次郎 三崎町仲崎
料理旅館 吾妻家 石川芳三郎	米商 溝川仙太郎 三崎町入舟	名所案内 名所エハガキ 神田幸次郎 三崎町入舟	菓子製造 賣 嶋清 三崎町花暮

◎御祝儀佛事等の

御用命は特に勉強仕候

和洋御菓子海月堂

三崎町入舟(神田)

◎多少に不拘御注文願上候

三浦共立汽船株式會社

三崎取扱所

(電話九番)

安くて都すし 宮越寅藏

三崎町花暮

●和洋酒類●

三留商店

三崎町の出

●荒物雜貨●

那古屋號

鈴木吳服店

三崎町日ノ出

祝

發

刊

縣會議員

澤村政太郎

三崎町入舟

縣會議員

下里代藏

三崎町日ノ出

縣會議員

宮川長五郎

三崎町六合宮川

學校用品
提燈

岩野貞助
三崎町日ノ出

エハガキ
雜貨内

常盤
三崎町汽船發着所前

純良醫科
工業藥品
有效賣藥
處方調劑

三崎町西野
東京丹頂堂藥舖支店
藥劑師 金森信吉

瀬戸物商
飯塚辨藏
三崎町入舟

米商
抱井商店
三崎町宮城

三崎名産
塩
久野又兵衛
三崎町花暮

△エハガキ
△名所案内等もあり

米穀類
和洋酒類

石油砂糖

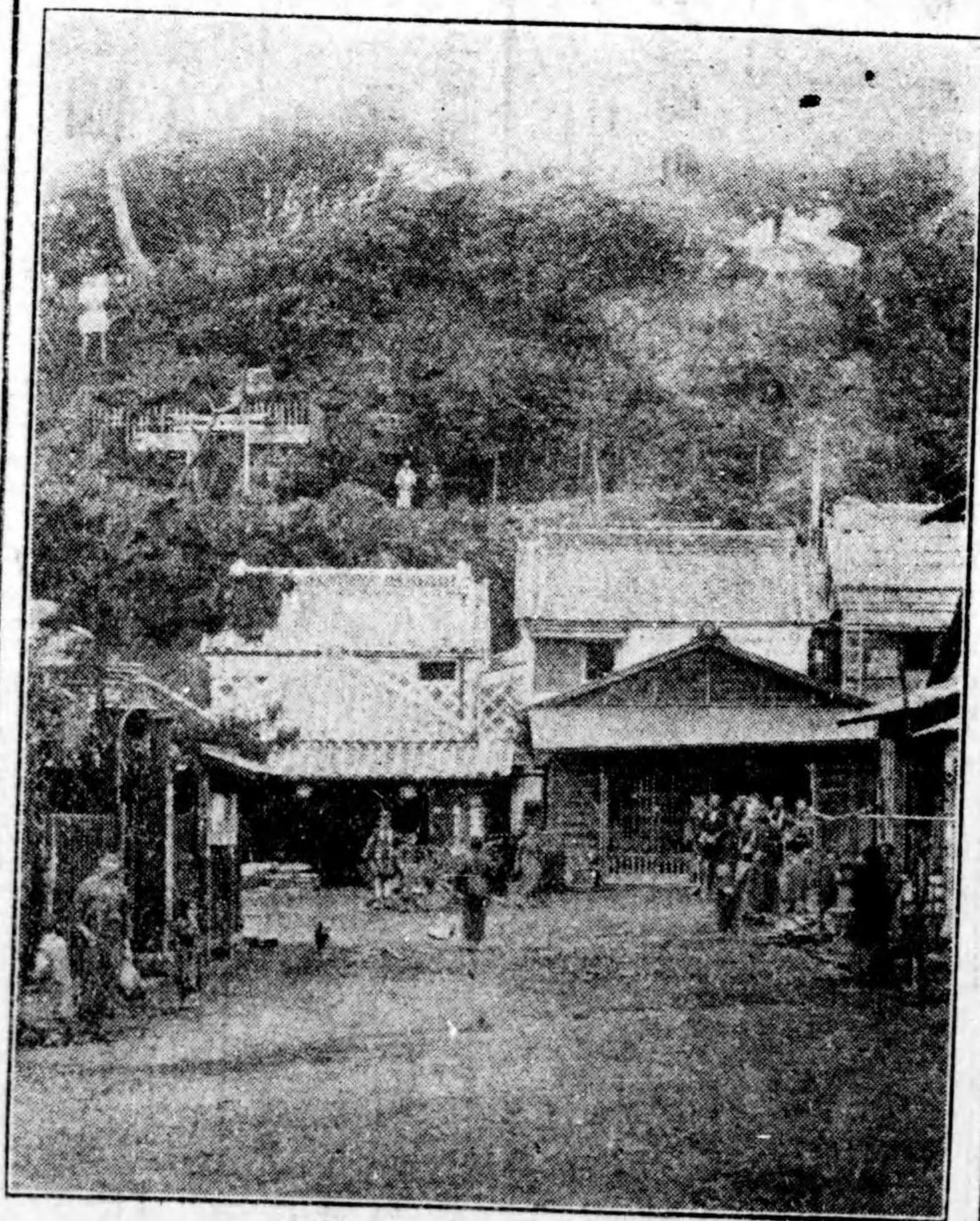
其他雜貨類

親切、安價に販賣仕
る可く候

相州三崎町西野(電話十番)

香山商店

電署(カヤ)又ハ(カク)



露光量違いの為重複撮影

三崎名所案内を視す

Empty space for the left photograph

三崎名所案内を視す

<p>魚商 澤村國松 三崎町花暮 電話十七番</p>	<p>全無 搾取販賣所 乳菌 荒本常吉 三崎町二町谷</p>	<p>乾物商 鈴木由造 三崎町入舟</p>	<p>古物商 星野三之助 三崎町上橋 電話十二番</p>
<p>三崎町日の出 小間物類 化粧品類 江畑商店</p>	<p>米商 小牧徳二郎 三崎町仲崎</p>	<p>和洋 御菓子 昆沙門屋 鈴木喜太郎</p> <p>夏季中は食パン製造仕る可く候 其他御注文に 應じ種々品々 調製致します</p>	

露光量違いの為重複撮影

(三崎名所案内を刊す)

東京京橋南傳馬町三丁目

星製藥株式会社

電話(特)京橋一七八五。二二七九
振替東京二〇五二二番

(三崎名所案内を刊す)

魚商 澤村 國松 三崎町花巻 電話十七番	採取販賣所 魚商 荒本 常吉 三崎町二町谷	乾物商 鈴木 由造 三崎町入舟	古物商 星野 三之助 三崎町上橋 電話十七番
小島町 江畑 商店 三崎町日の出	米商 小牧 徳二郎 三崎町仲崎	○三崎町○ 御菓子 屋門 妙見 三崎町水輪	○入舟○ 夏季中は食パン製造仕可 く、 其の注文に 應じ、 製法します

三浦郡北下浦長澤

藤里 堅誠

三崎町海南

増井藤三郎

三崎町東岡

松井清吉

東京灣汽船株式會社

三崎荷客扱所

(電話八番)

電話二三四番

◎本社

完全せる機械と熟練の職工を有し印刷の鮮麗と急速を特色とす



横須賀印刷株式會社

川

◎本社

活版、石版、寫真版、木版其他印刷製本に附隨する事業一切

町

三崎町入舟

大野寅尾

三崎町小學校

職員一同

三崎町

寺院一同

三崎町仲崎(電話六番)

魚商 久野六松

一和洋唐物類

一釣道具類一式

相州三崎町仲崎

杉山商店

一米穀一煙草

一酒類

三崎町西野

山田芳次郎

品質精良

米穀、麻類、疊表其他雜貨

相州三崎町入舟(電話四番)

笹本商店

學校文房具

其他雜貨類

相州三崎町東岡

小津久三郎

營業科目

- 一 船道具及艦
- 一 煙草袋物
- 一 筆 紙 墨
- 一 小間物類

三崎名勝繪葉書種々

取揃に置き申し候

相州三崎町仲崎(郵便局前)

繪葉書
元祖 **松崎國松**



東京市京橋區新船町

東京灣汽船株式會社

電話京橋一二

晝
夜
寫眞撮影

三崎町入舟(不動山)

三上寫眞館

三崎町日の出

草場林太郎

良乳無菌に依り

滋養衛生に適し申し候

三崎町諸礎

牛乳搾取業

三堀喜右衛門

三崎浦賀間馬車

至極安全にして頗る便利なり

三崎町東岡

三崎馬車乗合所

平本兼吉

三崎町諏訪

猿橋傳

(電話十八番)

木綿類 綿布類 古着

毛織物各種仕立

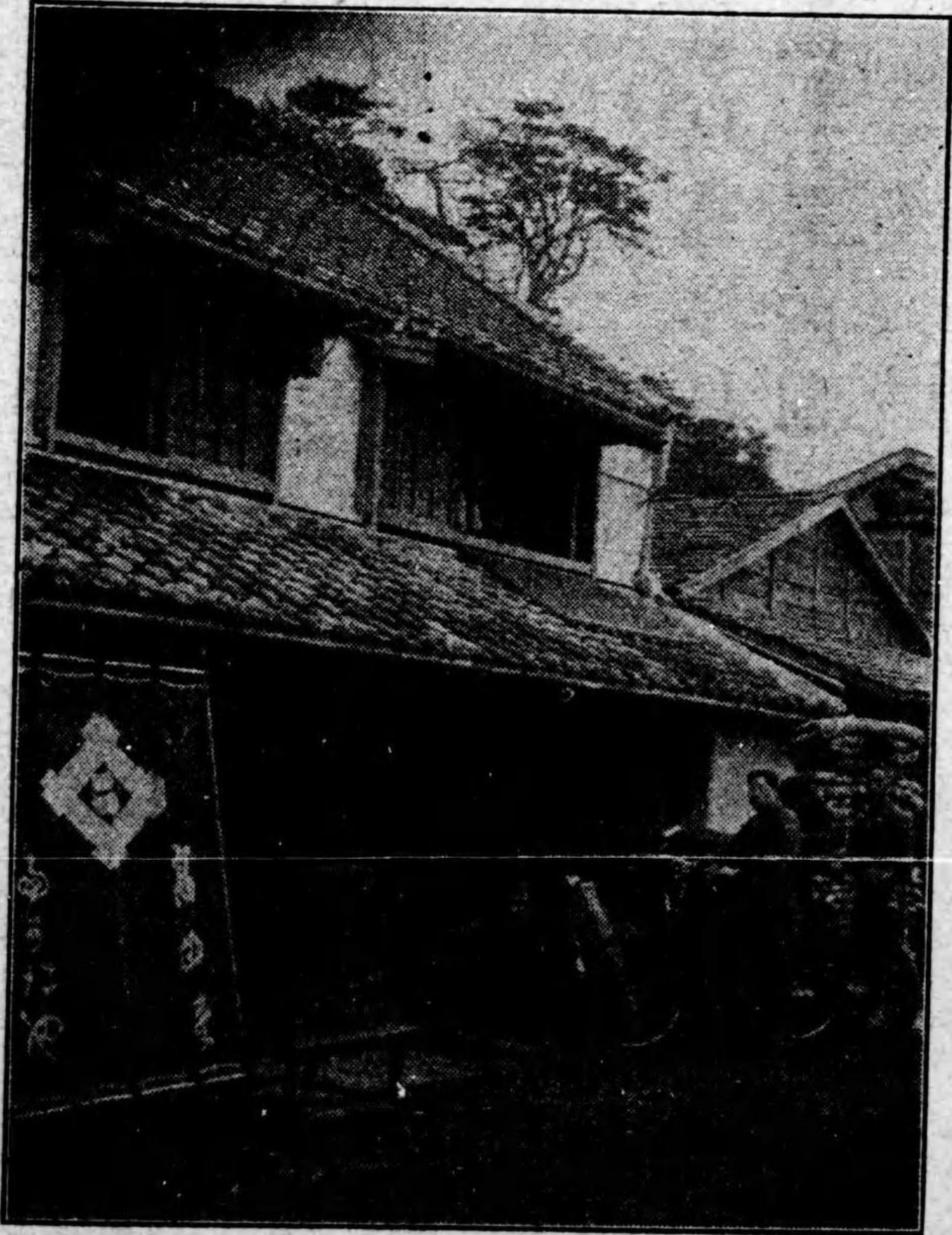
夜具布團 蚊帳 各種仕立

弊店ハ徳儀ヲ旨トシ掛引等
ハ致サズ安價ニ販賣仕ルベ
ク候

三崎町日の出

高田屋號 高橋傳三

電略(タカ)



旅 館

◎客室は清潔にして
 ◎空氣の流通殊に宜し
 ◎諸事御客様の御便利を計り
 ◎御取扱は最も町重なり

東京靈岸島
 汽船發着所前

寶 屋

御料理御手輕に新鮮のものを選び申す
 可く、御滞在の御客様は御丁寧に御取
 扱ひ申す可く候

相州三崎町日ノ出

旅館 青柳館

室内清麗に、風通しよく居心地よきは
 弊館の誇りとする處に御座候

相州三崎町入舟

旅館 紀伊國屋

◎下駄類 ◎煙草
 ◎傘 其他雜貨類

相州三崎町日ノ出

鈴木徳次郎

◎繪葉書 ◎三崎名所案内
 ◎三崎名所お盆 ◎貝細工類

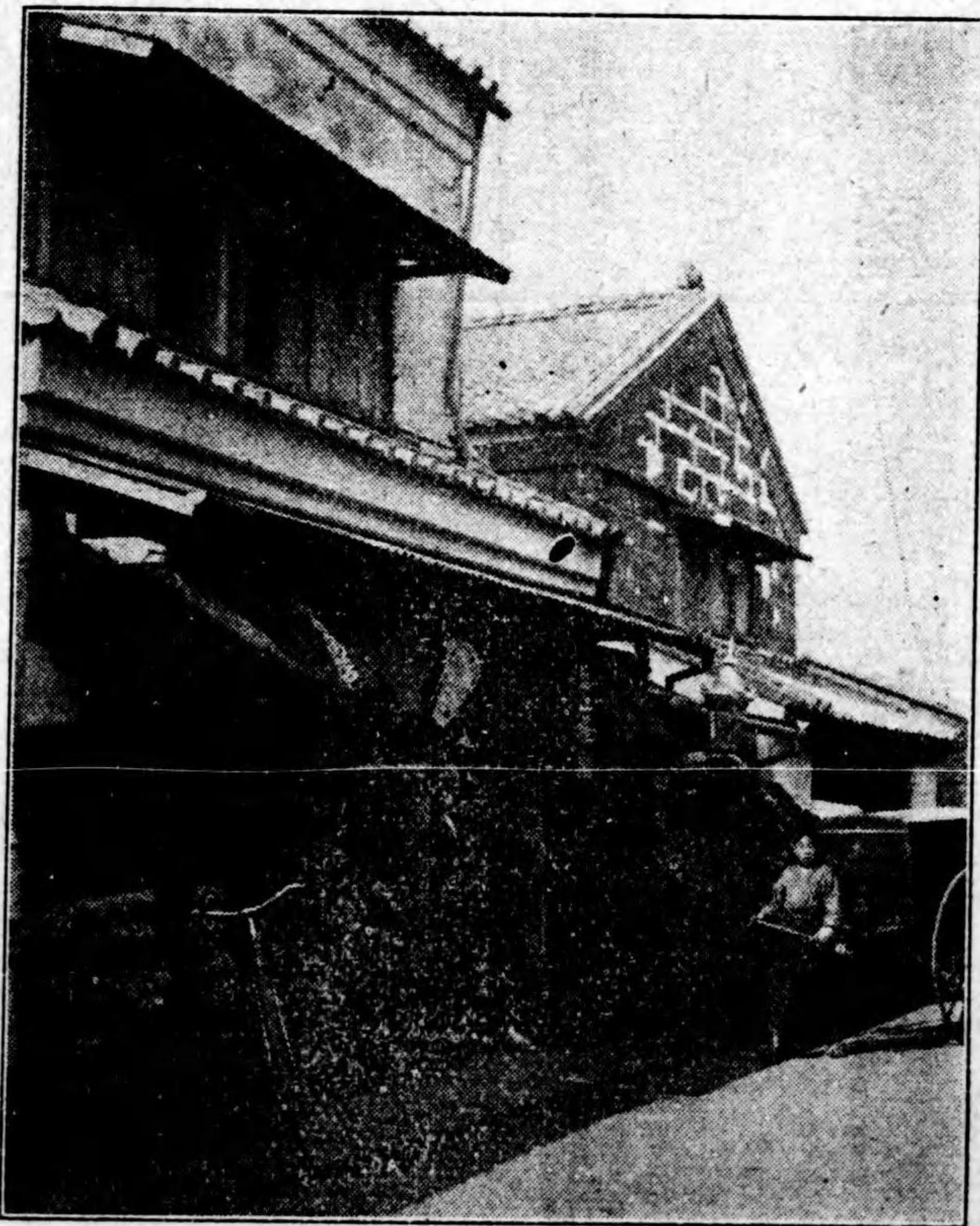
相州三崎町上橋

青木彌吉

四方の御得意様愈よ
御健勝に涉らせられ
候段恐悦至極に奉存
候弊店儀日に月に隆
盛に赴くは江湖各位
様の御引立ご厚く御
禮申上候尚ほ種々新
品の品取揃置き候間
倍舊の御愛顧あらん
事偏に奉希望候敬白

相州三崎町日の出

梅原呉服店



三浦電気株式会社

三崎町六合諏訪の上

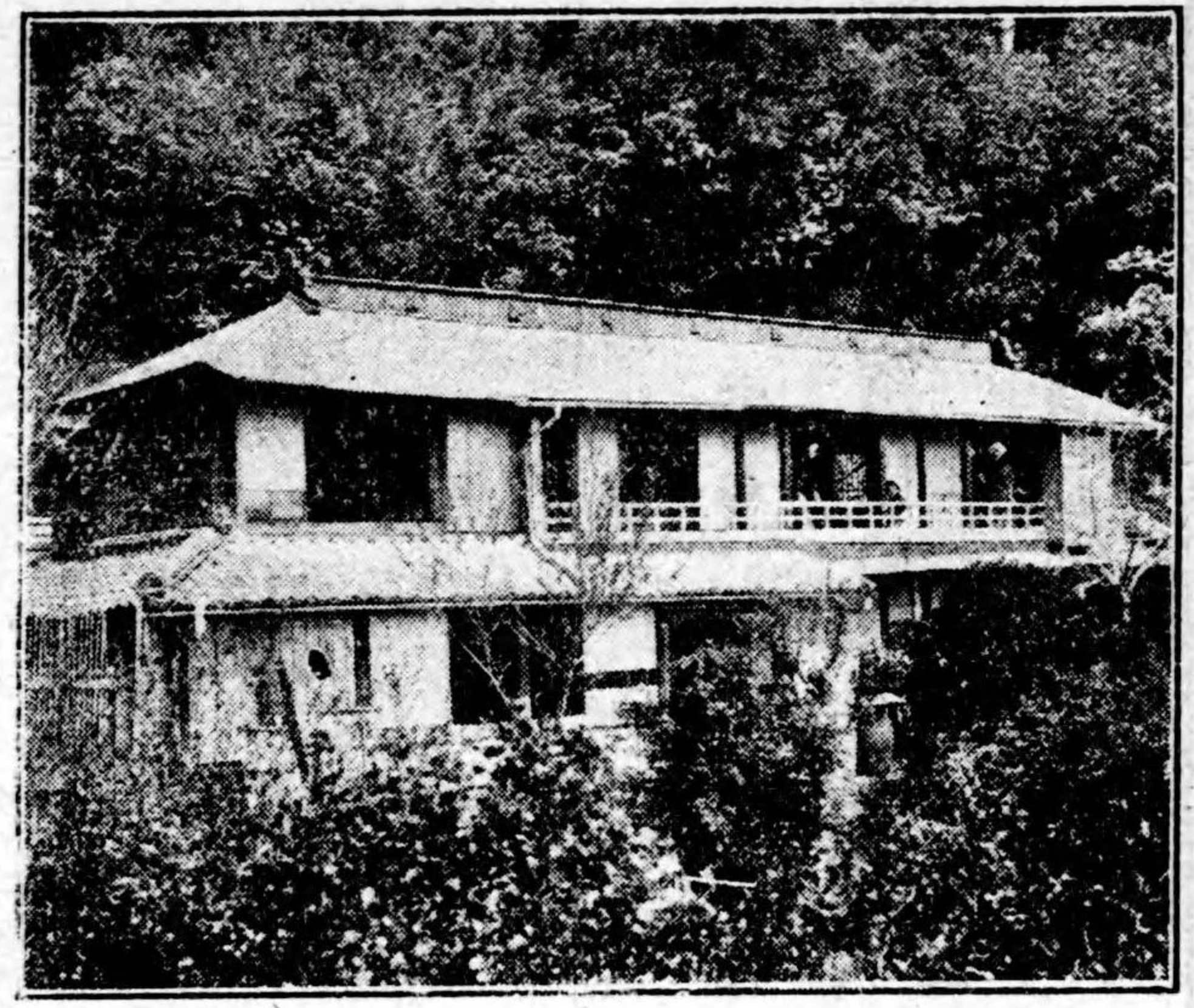
三崎製氷株式会社

三崎町向ヶ崎

米穀商 (南部屋)

石渡吉藏

三崎町西野



□ 高燥にして空氣の流通よく海岸に臨み風光愛するに足る

□ 御賄方は御手輕にして親切を旨とし御居心宜きは弊館の特色なり

相州三崎町日の出

旅館 御料理 温泉亭

(電話十九番)

□ 避暑防寒病後の御保養は勿論春秋の興樂に富むは他館と異なる也

□ 御滞在の御客様に對しては萬事家族的に御取扱ひ致すべし

露光量違いの為重複撮影

三崎町名所案内を刊すに就て

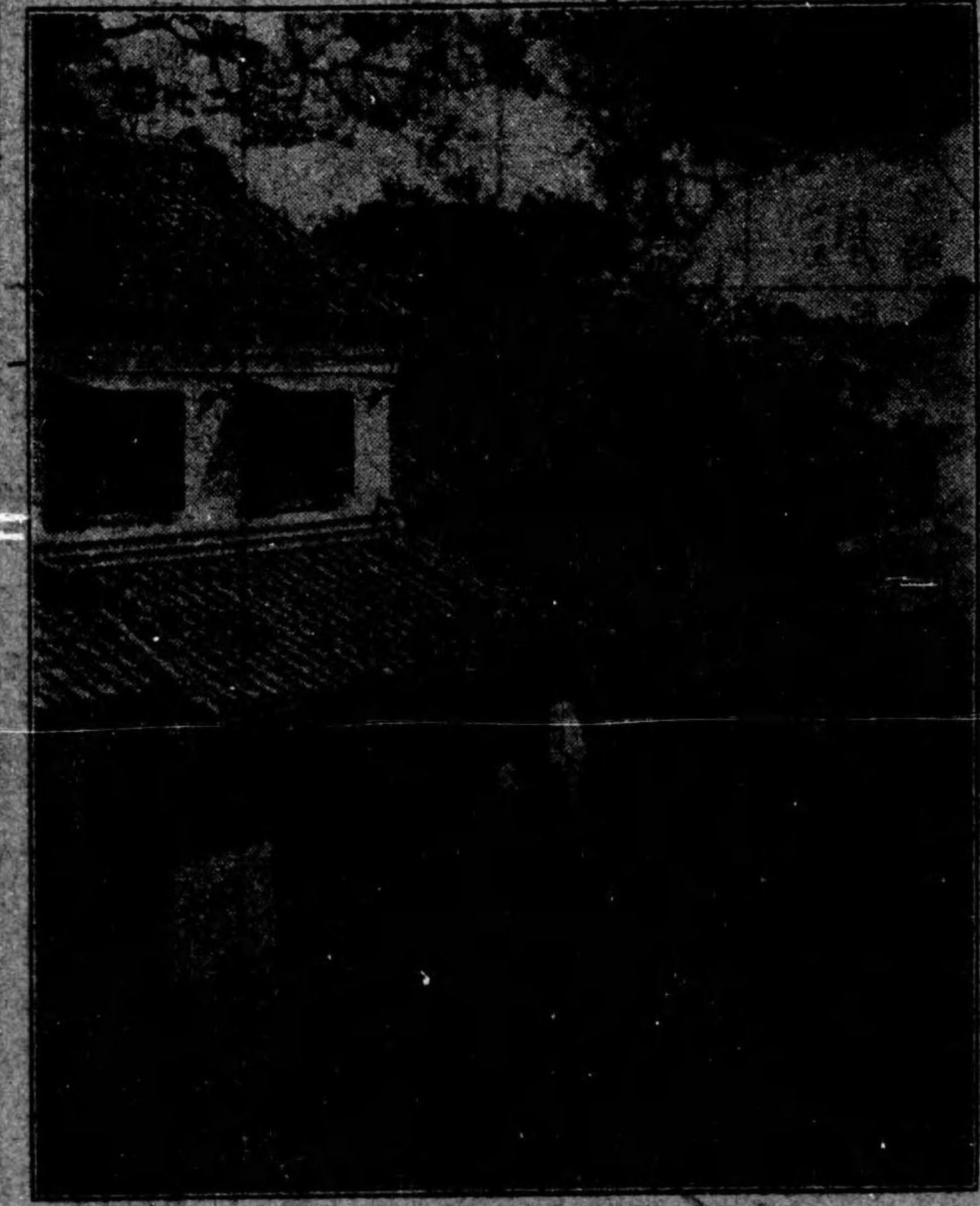
◎營業目錄

一米穀酒類

一砂糖雜貨商

三崎町上橋

抱井商店



三崎町名所案内を刊すに就て

星製藥株式會社
三浦郡一手特約店

佐藤藥舖

三崎町花暮

三崎町特約店

仲野崎 西野崎 海南海野崎 原島 城ヶ島 諏訪ヶ島

松崎國信 金井藤三 增井廣三 高橋松太 梶川文五 脇坂芳五 黒澤文五 出芳五

●三崎町 ●西野 ●

和洋御菓子 濱田屋

抱井寅次郎

三崎土産

名所せんべい

三崎名所八景に形とれる極めて

風流の御土産せんべいあり

三崎町入舟

松本

露光量違いの為重複撮影

三崎名所案内を刊す

◎營業目錄

一米穀酒類

一砂糖雜貨商

三崎町上橋

抱井商店



三崎名所案内を刊す

星製藥株式會社
三浦郡一手特約店

佐藤藥舖

三崎町花暮

三崎町特約店

仲野崎 西の南 海の出 原の島 城ヶ島 諏ヶ島 向ヶ島

松崎國吉 金森三郎 井藤廣三郎 高橋太 梶川松太 脇坂文五郎 黒澤芳五郎 出崎三郎

●三崎町●

●西野●

和御菓子 濱田屋

抱井寅次郎

三崎土産

名所せんべい

三崎名所八景に
形とれる極めて
風流の御土産せ
んべいあり

三崎町入舟

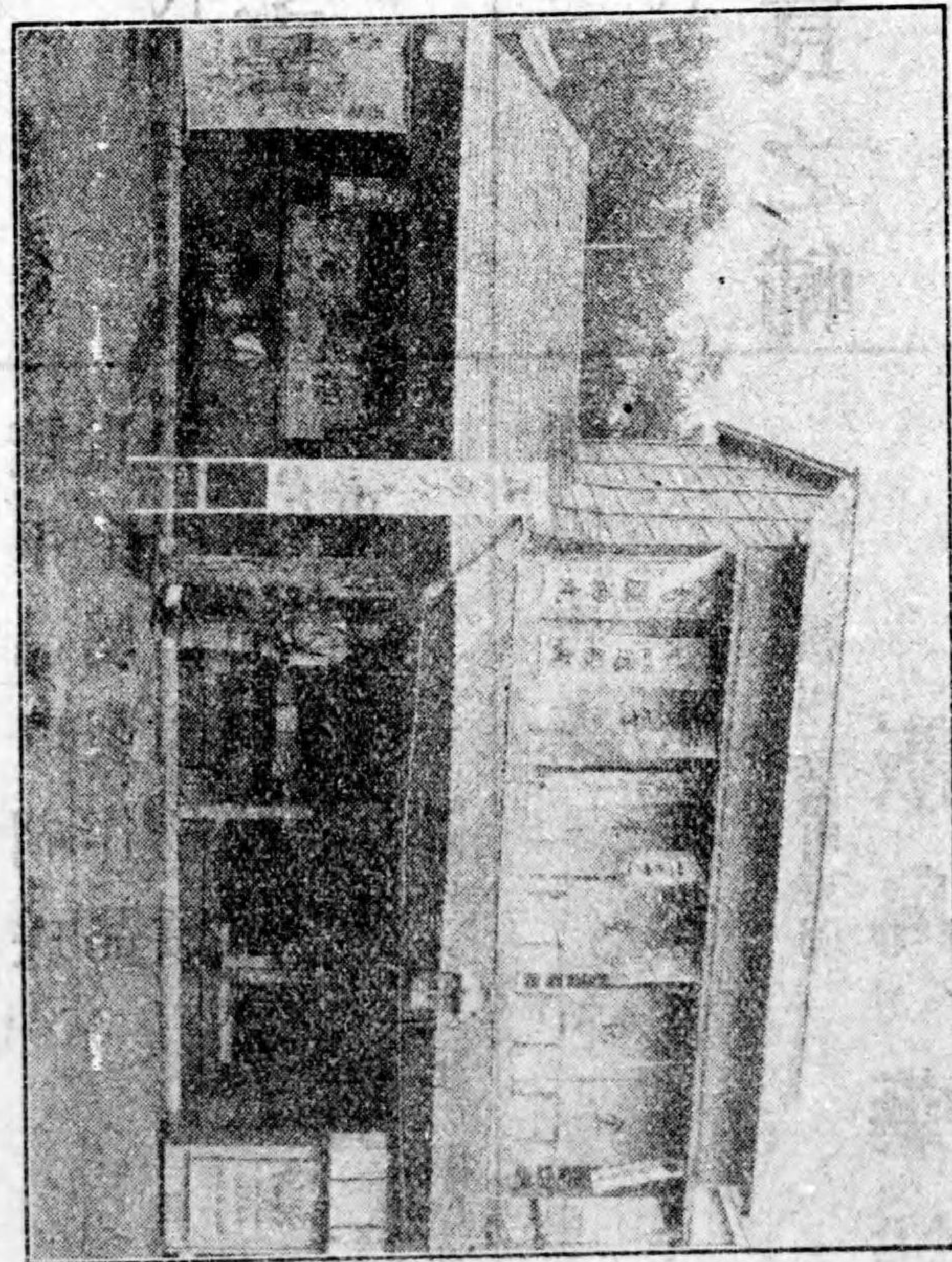
松本

學校用品 高木圓藏 <small>三崎町日ノ出</small>	和洋唐物類 其他雜貨 坂野佐吉 <small>三崎町日ノ出</small>	米商 佐伯光太郎 <small>三崎町上橋</small>	米商 永塚商店 <small>三崎町向ヶ崎</small>
生うば 紀の代 <small>三崎町日ノ出</small>	三崎町諏訪 小村ウラ <small>(電話十六番)</small>		

三崎町小網代 杉田良之輔	三崎町小網代 小管喜代松
諸國賣藥 其他雜貨類 <small>相州三崎町東岡</small> 飯島藥舖	美貴鼈 術金甲 其他小屬 學校間製 用品物作 品類品珠 東屋號 青木梅吉 <small>三崎町日ノ出(紀の國屋前)</small>

有高等名賣藥品
其高其
三崎町(北條)

川奈郡回春堂代理店
星製藥株式會社特約店



黒澤文三
黒文商店藥品部

藥品貨

賣粧化

名等他

有高其

三崎町(北條)

黒澤文三

電信略號(夕ロ)

▲▲下
荒物雜貨

山下爲吉

三崎町

時計式
及修繕

笠井時計店

三崎町海南

瀬戸物
雜貨商

野村萬吉

三崎町入舟

萬小間物
荒物雜貨商

石井新之助

三崎町西野

◎名所エハガキ◎
◎名所案内◎

萬小間物
煙草
其他雜貨

佐々木元三郎

三崎町日の出

弊館は誠實を主とし

御客様の御扱は最も親切也

旅館 三崎館

館主 渡邊金太郎
三崎西ノ町

三崎町向ケ崎

三輪 ツネ

(電話十五番)

三崎町西野

佐々木ウメ

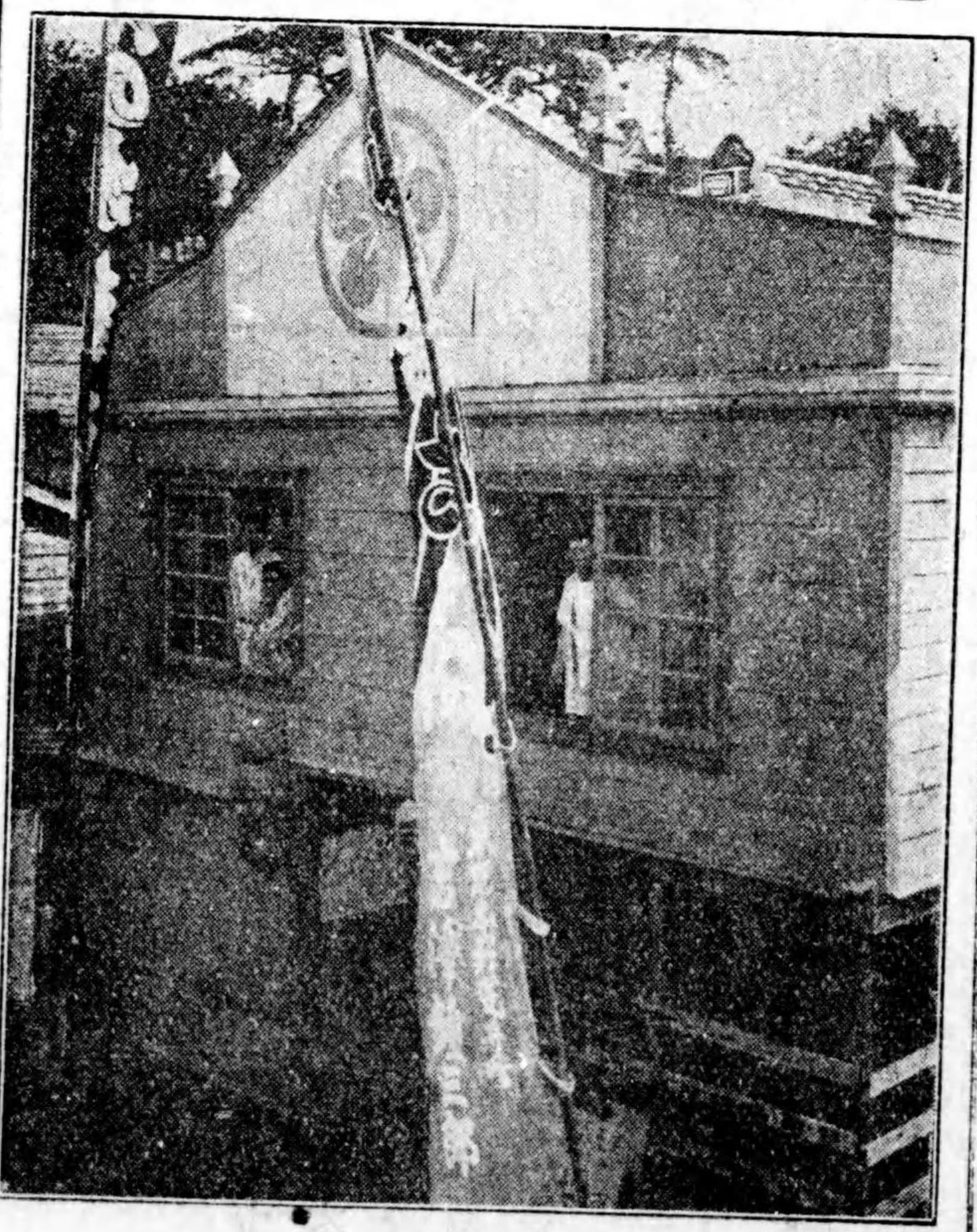
旅館 初聲館

●三崎は三浦半島の名所に候
本館は海濱に突出し居り座ながら波の
音を耳にして眺望は絶佳に候

弊館は洋館建
てにして清新
の空氣流通よ
く當地演藝場
の魁なり

相州三崎町入舟

常設 三岬館



三崎湯屋組合

向ケ崎	向ケ崎	日の出	上橋	宮城	入舟	花暮	西野
尾崎	入崎	日の出	柳	文	高	花	芳
湯	湯	湯	湯	湯	湯	湯	湯

薬妙みちう

栗田
うちみ
専門薬

●有名賣薬
●高等化粧品

本店のちうみ専門薬は
驚く程効果あり

本店 芝本區 芝本區 芝本區
店本 堂 菊 金
支店 三崎 三崎 三崎
山 本 本 本

米商 尾崎商店

三崎町向ケ崎

終

